平成16年度年報

Annual Report 2004

四日市大学環境情報学部
Faculty of Environmental and Information Sciences
Yokkaichi University

平成 17 年 3 月 March 2005

目 次

第 1 章　教員別研究・教育報告 **3**
1.1　朝日 幸代，ASAHI Sachiyo 4
1.1.1　研究活動 4
1.1.2　教育活動 5
1.1.3　社会活動 6
1.2　粟屋 かよ子，AWAYA Kayoko 7
1.2.1　研究活動 7
1.2.2　教育活動 8
1.2.3　社会活動 8
1.3　飯島　美夏, IIJIMA Mika 9
1.3.1　研究活動 9
1.3.2　教育活動 10
1.3.3　社会活動 10
1.4　井岡 幹博，IOKA Mikihiro 11
1.4.1　研究活動 11
1.4.2　教育活動 11
1.4.3　社会活動 12
1.5　植田 栄二，UEDA Eiji 13
1.5.1　研究活動 13
1.5.2　教育活動 14
1.5.3　社会活動 14
1.6　大倉 克己，OHKURA Katsumi 15
1.6.1　研究活動 15
1.6.2　教育活動 16
1.6.3　社会活動 16
1.7　小川束，OGAWA Tsukane 17
1.7.1　研究活動 17
1.7.2　教育活動 18
1.7.3　社会活動 18
1.8　加納 光，KANO Hikaru 19
1.8.1　研究活動 19
1.8.2　教育活動 19
1.9　北島 義信, KITAJIMA Gishin 20
1.9.1　研究活動 20
1.9.2　教育活動 21
1.9.3　社会活動 21

1.10 木村 敬, KIMURA Takashi 22
1.10.1 研究活動 22
1.10.2 教育活動 23
1.10.3 社会活動 23
1.11 黒島哲夫, Kuroshima Tetsuo 24
1.11.1 研究活動 24
1.11.2 教育活動 25
1.12 杉田詔子，SUGITA, Shoko 26
1.12.1 研究活動 26
1.12.2 教育活動 26
1.13 武本　行正，TAKEMOTO Yukimasa 27
1.13.1 研究活動 27
1.13.2 教育活動 29
1.13.3 社会活動 29
1.14 田中 伊知郎，TANAKA Ichirou 30
1.14.1 研究活動 30
1.14.2 教育活動 30
1.14.3 社会活動 31
1.15 田中　正明, TANAKA Masaaki 32
1.15.1 研究活動 32
1.15.2 教育活動 33
1.15.3 社会活動 33
1.16 千葉 賢，CHIBA Satoshi 34
1.16.1 研究活動 34
1.16.2 教育活動 35
1.16.3 社会活動 36
1.17 都島　功，TSUSHIMA Isao 37
1.17.1 研究活動 37
1.17.2 教育活動 37
1.17.3 社会活動 37
1.18 豊島　政実，TOYOSHIMA　Masami 39
1.18.1 研究活動 39
1.18.2 教育活動 40
1.18.3 社会活動 40
1.19 中西 紀夫，NAKANISHI Norio 42
1.19.1 研究活動 42
1.19.2 教育活動 42
1.19.3 社会活動 42
1.20 新田 義孝，NITTA Yoshitaka 44
1.20.1 研究活動 44
1.20.2 教育活動 44
1.20.3 社会活動 45
1.21 波多野 憲男, HATANO Norio 46

1.21.1 研究活動 46
1.21.2 教育活動 47
1.21.3 社会活動 47
1.22 播磨　良紀，HARIMA Yoshinori 48
1.22.1 研究活動 48
1.22.2 教育活動 49
1.22.3 社会活動 49
1.23 Eric Bray 51
1.23.1 研究活動 51
1.23.2 教育活動 51
1.24 本部 賢一，HONBU Kenichi 53
1.24.1 研究活動 53
1.24.2 教育活動 54
1.24.3 社会活動 54
1.25 山形 多聞，YAMAGATA Tamon 55
1.25.1 研究活動 55
1.25.2 教育活動 55
1.25.3 社会活動 56
1.26 山本　伸，YAMAMOTO Shin 57
1.26.1 研究活動 57
1.26.2 教育活動 58
1.26.3 社会活動 58
1.27 吉山　青翔，YOSHIYAMA Seisho（王　青翔，WANG Ching-shiang） 59
1.27.1 研究活動 59
1.27.2 教育活動 59

第 2 章　学部としての活動 **60**
2.1 活動記録 60
2.2 新聞記事 61

前書き

この『平成 16 年度年報（Annual Report 2004）』は環境情報学部の専任教員の平成 16 年（2004 年）4 月から平成 17 年（2005 年）3 月までの 1 年間の研究活動，社会活動を記録したものです．本年報の目指すところは専任教員の主として研究活動に関する自己点検をするとともに，その公開によって環境情報学部のイメージを少しでも広く知っていただくことにあります．

本年報では，記載範囲をこの 1 年間に限定しているため，各教員の研究，社会活動の最新情報を知ることができる一方，学部総体としてのアクティビティをはかる目安ともなっております．本年度も非常に活発な研究，社会活動が行われ，学術，社会の両面において貢献することができたと自負しております．今後さらに，本年報所収の各教員の報告を契機として，共同研究など外部との交流が盛んになれば望外の喜びです．

『年報』はまだほんの 8 年間の蓄積にすぎませんが，その間の教員と学部の足跡を通覧することは将来への反省ともなり，自信ともなり，さらに希望ともなります．引き続き関係各位のご理解とご鞭撻のもとに，積極的な研究，社会活動を進めて行く所存です．今後とも多くの方々の一層のご理解を賜れますように工夫を加えて行きたいと思います．ご意見があればぜひともご一報くださるよう，お願い申し上げます．

平成 17 年 (2005 年) 3 月
四日市大学環境情報学部

教員・各種委員一覧

氏名	職名・学位	委員会 (◎印は委員長)
学部長 武本行正	教授・農学博士	大学協議会，自己点検・評価，全学教務，国際交流，コラボレーション運営，入試実施専門，カリキュラム
学科長 波多野憲男	教授・工学博士	自己点検・評価，コラボレーション運営，入試実施専門，カリキュラム
教学部長 小川東	教授・博士 (学術)	大学協議会，自己点検・評価，全学教務 (◎), 全学学生 (◎)，国際交流，公開講座運営， コラボレーション運営，カリキュラム
渉外部長 北島義信	教授・文学修士	大学協議会，自己点検・評価，全学学生 学生 (◎)，就職 (◎), 国際交流
情報センター長 植田栄二	教授	自己点検・評価, 情報センター運営 (◎)
粟屋かよ子	教授・理学博士	教務 (◎)，全学教務
王健平	教授・工学博士	公開講座運営, 職員共済会
大倉克己	教授・農学博士	全学教務
北畠正義	教授・医学博士	公開講座運営
城之内忠正	教授・工学修士	コンピュータセンター運営，ホームページ運営
田中正明	教授・博士 (農学)	共同研究，入試実施専門
千葉賢	教授・工学博士	カリキュラム
都島功	教授・工学博士	論集編集 (◎)，ホームページ運営
豊島正実	教授・工学修士	教務
新田義孝	教授・工学博士	
播磨良紀	教授・文学修士	全学学生，学生
山形多聞	教授	
吉山青翔	教授・博士 (理学)	入試実施専門
朝日幸代	助教授・修士 (社会科学)	就職
井岡幹博	助教授・農学修士	コンピュータセンター運営
加納光	助教授	自己点検・評価，全学学生，国際交流，留学生協議会
黒島哲夫	教授・農学修士	就職，職員共済会（監事）
杉田詔子	助教授	情報センター運営
田中伊知郎	助教授・理学博士	共同研究，四日市大学学会
中西紀夫	助教授・法学修士	
E. ブレイ	助教授・教育学修士	公開講座運営
本部賢一	助教授・博士（工学）	カリキュラム
山本伸	助教授・教育学修士	教務
飯島美夏	講師・博士（工学）	論集編集

第1章　教員別研究・教育報告

各教員の研究・教育報告の記述項目は大きく，**研究活動**，**教育活動**，**社会活動**からなる．

研究活動における**本年度の研究課題・概要，創作課題・概要**は2004年度の研究課題および創作課題の概要を記載したものである．**発表論文・図書**は，2004年度に発表した論文，図書，あるいは作品を記載したものである．2003年度以前に発表した論文・図書，作品に関しては，前年度以前の『年報』を見られたい．学部ホームページにも掲載している (URL: **http://www.yokkaichi-u.ac.jp/kankyo/**). なお本欄には，研究の最新情報を記載するため，投稿中のものも含んでいる．**口頭発表**欄は，2003年度中に開催された学会，研究会における研究発表，あるいは各種展示会における作品の出品について記載したものである．

教育活動における**専任科目**は本学部での担当講義科目を，**兼担科目**は総合政策学部や経済学部での兼担科目を，**兼任先（担当科目）**は他大学への非常勤と担当科目を，それぞれ記載している．また，これらの項目に該当しない教育活動がある場合は，**特別な教育活動**に記載している．各教員の講義概要については,『平成16年度環境情報学部シラバス (講義要項)』(四日市大学教務課) を見られたい．

社会活動における**学会委員**は学会における委員活動を，**共同研究**は他組織との共同研究を，**外部委員**は審議会委員などの学識経験者としての社会活動を，それぞれ記載している．また，**講師**欄には各種講演会における講演の記録を，**学術論文以外の発表物**に研究活動の範疇に入らない発表物を記載している．

なお，教員の記載順序は五十音順である．

1.1　朝日 幸代，ASAHI Sachiyo

1.1.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．新エネルギー、風力発電における地域経済研究

本研究は温暖化防止の取り組みとして近年注目されている新エネルギー、風力発電において、過去 20 年における政府の政策、現状、そして地域における経済性、建設効果、および環境へのプラスの寄与について研究している。現状については、全国調査を行い、風力発電における利点、問題点を明らかにした。次に風力発電量とその発電量による CO2 削減効果と風力発電の経済性について分析を行った。さらに、風力発電建設における地域経済への波及効果を地域間産業連関分析を用いて、雇用面も含め分析している.

２．地域産業連関表の研究

地域産業連関分析研究は過年度にわたって研究を続けているものである。今年度は特に地域間交易に関する情報として、調査データを調べ、地域政策への適用方法を検討した。この地域間交易の分析は、震災などの災害における物流への影響や地域経済における物流の問題点を明らかにする可能性がある他、環境および観光政策についての地域特性を生かした政策を行うことができるものである.

３．エネルギー環境教育研究

経済産業省資源エネルギー庁の委託事業である (財）社会経済生産性本部エネルギー環境教育情報センターのエネルギー教育調査普及事業・地域拠点大学に平成 14 年度に応募した。その結果, 平成 14 年度から平成 16 年度の 3ヵ年の研究を行うこととなり、本年度が最終年である。この研究は小・中・高校の教員の方や行政，民間企業の方々18 人と研究会を行いながら，エネルギー教育のカリキュラムを作成することが目的である。本年度はエネルギー，新エネルギーとして風力，ビオトープの分科会を進め、エネルギー環境教育の問題点や総合学習の問題点を含め情報収集を行った。そして中部地域の地域性を検討するために，名古屋工業大学との合同見学会を開催したほか、三重県立久居農林高等学校と三重県立四日市農芸高等学校とのエネルギー環境教育実践授業の開催、暁小学校とのエネルギー環境見学と模擬講義等多数開催した。3ヵ年の研究について最終取りまとめを行っている。最終報告書は来年度に出版物としてまとめなおす予定である.

発表論文・図書，作品

1. 朝日幸代 (2004)「環境保全のための企業活動」『地球環境 2004-05』財団法人電力中央研究所［編著］佐藤太英［監修］P161-176，エネルギーフォーラム.
2. 朝日幸代 (2005)「風力発電導入における環境と経済の有効」『環境問題の理論と政策』寺田宏洲編, 晃洋書房. 印刷中.
3. 朝日幸代 (2005)「日本の経験を中国の環境保全に生かす–四日市公害の研究を天津の環境、経済の研究へー」East Asian Forum. 山口大学経済学部東亜経済研究所. 印刷中

4. Sachiyo Asahi’Evaluation of the potential for Wind Power Generation in Japan’ Proceedings of The 5th Asia-Pacific Conference on Sustainable Energy And Environment Technology,(2005) New Zealand,（投稿中）.

口頭発表・学術講演

1. 環太平洋産業連関分析学会　報告者石川良文氏（南山大学）報告論題：災害の地域経済影響と地域間産業連関分析の討論者を務める。立命館大学びわこキャンパス (2004 年 10 月 30 日 (土)、10 日 31 日 (日).

1.1.2　教育活動

専任科目

基礎セミナー＜地域経済シミュレーション＞, 専門セミナー＜地域経済シミュレーション＞, 地域経済シミュレーション, 環境のための統計学, 経済データベース論

兼任先 (担当科目)

四日市大学経済学部 (データ統計処理 1, データ統計処理 2)、三重大学人文学部（統計学）

特別な教育活動

1. エネルギー環境教育模擬授業およびイベント（四日市大学, 八郷西小学校 4 年生,2004 年 6 年 5 日).
2. エネルギ?施設見学会開催（四日市大学、名古屋工業大学合同見学会）中部電力?浜岡原子力発電所、川越火力発電所内、メタノール製造実験施設、地球のたまご, 竜洋海浜公園、風力発電施設、太陽電池科学館、ソーラーアーク、太陽光発電（2004 年 8 月 10 日（火）～11 日（水））.
3. 暁小学校 5 年生、エネルギー環境教育模擬講義（2004 年 8 月 9 日（月).
4. 三重県立久居農林高等学校、三重県立四日市農芸高等学校エネルギー環境教育実践授業（2004 年 8 月 19 日（木）、8 月 20 日（金）).
5. 暁小学校 4 年生アクションプラン（2004 年 8 月 27 日（金)）.
6. 三重県立久居農林高等学校、模擬授業（2004 年 10 月 5 日 (火)）.
7. 三重県立白子高等学校、模擬授業（2004 年 11 月 16 日 (火)）.
8. 三重県立四日市農芸高等学校、模擬授業（2005 年 2 月 22 日 (火)）.

1.1.3　社会活動

外部委員

1. 三重県都市計画審議委員
2. 三重県新エネルギービジョン改定委員会委員
3. 三重県公共事業評価審査委員
4. 三重県環境審議会委員
5. 三重県事業認定審議会委員
6. 四日市市環境審議会委員
7. 名古屋市上下水道局行政評価外部評価委員
8. 久居市新エネルギー推進協議会委員
9. 市立四日市病院コンサル業者審査委員
10. 市立四日市病院地域医療支援懇談会委員

共同研究

1. 中京大学経済研究所「公共経済学研究」プロジェクト

その他

1. 経済産業省資源エネルギー庁の委託事業、(財）社会経済生産性本部エネルギー環境教育情報センター主催エネルギー教育研究，報告、ポスターセッション,2005 年 3 月 27 日（日）28 日（月）

1.2　粟屋 かよ子，AWAYA Kayoko

1.2.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．量子力学の観測問題

昨年度からの懸案の論文”Complementarity between Macro and Micro Warlds”を書き上げて，現在投稿中である．これは環境問題の解決を探る上で，私にとって重要な土台の１つである．

２．環境問題への取り組み

1. 日本物理学会の中に，新たに発足させることのできた「環境物理」の充実が求められている．私は，環境物理学を「時間的・空間的・資源的に有限な地球上で、人間を含めた生態系が存続するために、個々の科学・技術の可能性と限界を探求する学問」と規定し，学会誌にも発表してきた．しかし，個々の科学・技術の検討をするためにも，とりわけ世界観や方法論の問題が大きいと判断し（例えば，宇井純氏は「公害は専門の隙間から生じる」と言っている），学会発表等ももっぱらこの観点から行ってきた．同様の観点から，地球規模の現実のデータを駆使した演習形式の Harte のテキスト”Consider a Spherical Cow”の翻訳を呼びかけ，現在共同で翻訳中である．

2. 個別の検討の前に（或いは並行して）最低もう１つ必要なものとして，環境教育，或いはもっと広く環境学習の課題がある．これは,（子どもによる）既存の知識の単なる習得に終わるものでなく，われわれ大人も含めた人間が地球生態系の修復にどう主体的に関わるのかという極めて創造的な課題でもある．今年度の後期は，この課題の明確化に取り組んだ．基礎セミナーでは学内排水調査も実施する等具体的な実践も試み，春の学会で発表する予定である．今後，四日市公害という負の遺産をどのように生かしてゆけば人類史的課題につなげることができるかも探りたい．

発表論文・図書，作品

1. ”Complementarity between Macro and Micro Worlds”投稿中
2. ”Environmental Physics and the World View”投稿中

口頭発表・学術講演

1. 環境問題と（量子力学の）観測問題，日本物理学会，２００４年3月２８日
2. 「環境物理学」と統一的世界観，日本物理学会，２００３年9月１４日
3. Environmental Physics and the World View，アジア太平洋物理学会（ハノイ），２００４年１０月２７日
4. 環境学習のねらいと方法のための一試論，日本物理学会，２００５年3月２５日発表予定

1.2.2　教育活動

専任科目

環境物理学 a，b，環境分析化学・実験，基礎セミナー，専門セミナー，卒業研究セミナー

兼任先（担当科目）

四日市高等看護学院（環境論）

特別な教育活動

協和発酵ケミカル工場見学（基礎セミナー，２００４年１１月１０日）

1.2.3　社会活動

外部委員

1. 「四日市環境再生まちづくりプラン」市民会議事務局

その他

1. ハノイで開催されたアジア太平洋物理学会の最終日（１０月３０日）にもたれた、“Round Table Discussions on Women in Physics” において、特別コメントを行った。Proceeding に掲載される予定

1.3　飯島　美夏, IIJIMA Mika

1.3.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．カラギーナンヒドロゲルの熱的性質

本年度はカラギーナンヒドロゲルのゲル-ゾル転移を中心に検討した。同一試料を用いて、高感度示差走査熱量分析 (HS-DSC)、水中での熱機械分析 (TMA) および落球法でゲル-ゾル転移温度を測定し、各種測定法の特徴を明らかにした。

２．カルシウム架橋型ペクチンヒドロゲルの膨潤挙動

本年度は水中での熱機械分析 (TMA) を応用してカルシウム架橋型ペクチンヒドロゲルの膨潤挙動を検討した。水中での TMA 測定でヒドロゲルの膨潤挙動が測定可能であることを明らかにした。本内容は現在 Thermochimica Acta に印刷中である。

３．凍結-解凍法によるローカストビーンガムヒドロゲルのゲル化機構

本年度は凍結-解凍法によるローカストビーンガムヒドロゲル形成に及ぼす諸要因の影響を中心に検討した。ローカストビーンガムヒドロゲルは凍結-解凍サイクル数の増加とともに束縛水量が増加することを明らかにした。

４．κ-カラギーナン-メチルセルロース混合ゲルの相転移

低温でゲル化するκ-カラギーナンと高温でゲル化するメチルセルロースの混合ゲルを調製し、相転移温度を目視による傾斜法、高感度示差走査熱量分析 (HS-DSC) で測定した。混合比，濃度により異なる挙動を示すことを明らかにした。

５．環境適合型ポリウレタンの生分解性と熱的性質

本年度は廃糖蜜およびひまし油を分子鎖中に有するポリウレタン (PU) の初期の生分解性と熱的性質を検討した。環境適合型 PU を土壌に埋設すると質量が減少し、走査型電子顕微鏡 (SEM) で観察すると，分子鎖の切断が観測された。生分解前後の PU を熱重量-示差熱分析 (TG-DTA) で熱分解温度を測定すると、熱分解温度は土壌埋設時間の増加とともに低温側へ移動した。本研究は，今後さらに詳細な研究を行う必要があると考えている。

発表論文・図書, 作品

1. 飯島美夏,「環境・生活科学実験書－環境に優しい材料の基礎実験－」, 三恵社 (2004.9)
2. M. Iijima, T. Hatakeyama and H. Hatakeyama,“Swelling behaviour of calcium pectin hydrogels by thermomechanical analysis in water”, Thermochimica Acta (in printing)

口頭発表・学術講演

1. 高橋正人, 飯島美夏, 松本哲典, 鹿児島聡, 畠山立子, 畠山兵衛,「ザンタン/水系の相挙動に及ぼすキトサン添加効果」, 第 53 回高分子学会年次大会, 神戸 (2004.5.26)
2. 高橋正人, 飯島美夏, 松本哲典, 川添修一, 井出直樹, 畠山立子, 畠山兵衛,「多糖混合物/水系の相挙動に及ぼすブレンド効果」, 第 53 回高分子学会年次大会, 神戸 (2004.5.26)
3. T. Hatakeyama, S. Naoi, M. Iijima and H. Hatakeyama,“Locust bean gum hydrogels formed by freezing and thawing”, The 8th World Conference on Biodegradable Polymers and Plastics (BDPP8), Seoul, Korea (2004.6.1)
4. 高橋正人, 松本哲典, 水嶋真希, 飯島美夏, 中村邦雄, 畠山立子, 畠山兵衛,「ヒアルロン酸/水系の相挙動に及ぼすポリリシン添加効果」, 2004 年度繊維学会年次大会, 東京 (2004.6.9)
5. M. Takahashi, T. Matsumoto, M. Mizushima, M. Iijima, T. Hatakeyama and H. Hatakeyama,“Complex formation of hyaluronan/ polylysine/ water system”, World Polymer Congress MACRO , Paris, France (2004.7.4-9)
6. 高橋正人, 飯島美夏, 畠山立子, 畠山兵衛,「異種生体高分子間相互作用により形成される構造の水との親和性」, 第 40 回記念熱測定討論会, 東京 (2004.10.12)
7. 飯島美夏, 高橋正人, 畠山立子, 畠山兵衛,「多糖物理ゲルの水中における熱機械的性質」, 第 40 回記念熱測定討論会, 東京 (2004.10.14)
8. 飯島美夏, 船橋和博, 高橋正人, 畠山立子, 畠山兵衛,「κ-カラギーナン-メチルセルロース混合ゲルの相図」, 第 16 回高分子ゲル研究討論会, 東京 (2005.1.12)

1.3.2　教育活動

専任科目

コンピュータリテラシー，環境分析化学・実験，基礎セミナー 1，基礎セミナー 2，専門セミナー，卒業研究セミナー

兼任先 (担当科目)

大妻女子大学 (繊維科学 II 及び実験、被服材料学ゼミナール、卒業論文・卒業制作)

1.3.3　社会活動

学会委員

1. 日本熱測定学会委員

1.4　井岡 幹博，IOKA Mikihiro

1.4.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

1. 三重県地域結集共同研究「閉鎖性海域の環境創生プロジェクト」への参画

3 つの研究テーマのうちの「環境動態シミュレーションモデルの開発」のサブテーマ「流入負荷計算のプログラム開発」および「英虞湾集水域の汚濁負荷発生に関わる点源と面源の調査」を担当している．平成 16 年度は，以下の項目について，作業を行った．

- 英虞湾集水域の汚濁負荷発生に関わる点源と面源の調査．志摩市５町の都市計画基本図，ゼンリン住宅地図および三重県森林 GIS のデータをもとに，目視判読により英虞湾集水域の土地利用現況図を作成した．これは，最小土地区画を 10m，18 の土地利用項目を有している．また，メッシュの標高データも収集した．
- 英虞湾集水域の水質調査．前川，西川両河川の 12 調査点における採水分析と流量測定を行った
- 流入負荷計算プログラムの開発．点源と面源の調査で収集した土地利用に関するデータを GIS ソフトによりデータベース化した．英虞湾集水域からの汚濁流入負荷の推定を検討中である．

2. イオン環境財団助成「中国天津市における重金属土壌汚染が生態系に及ぼす影響の実態調査」への参画

天津市の重金属汚染土壌を植物修復によって浄化することを目的とし，この調査では，1 つの地点に焦点を絞り, 重金属汚染の実態を把握する計画である．平成 16 年 3 月に現地で採取地点を GPS で計測し，GIS でデータベース化した．四日市大学環境情報学部，三重県化学振興センター保健環境研究部，北京大学環境学院の国際共同研究である．

発表論文・図書，作品

1. 「英虞湾集水域における汚濁負荷発生に関する点源と面源の調査」四日市大学環境情報論集, 第 8 巻第 1 号，2004 年 9 月

1.4.2　教育活動

専任科目

データベース論，コンピュータグラフィックス，コンピュータグラフィックス演習，基礎セミナー（画像処理），専門セミナー（画像処理），卒業セミナー

兼任先（担当科目）

1. 三重大学（数値計算と統計処理，情報数学概論，情報数学演習）
2. 四日市医師会看護専門学校（情報科学）

3. ユマニテク東洋医療専門学校（コンピュータ概論?T）

特別な教育活動

1. 情報処理技術者試験勉強会（2005 年 3 月）
2. AO 入試合格者事前授業（コンピュータ入門）講師（2005 年 2 月）

1.4.3　社会活動

講師

1. 空間情報シンポジウム 2004「GIS による流域情報の管理」（7 月 28 日）
2. 北勢広域水道事業促進協議会総会「地理情報システムによる河川流域情報の蓄積とその利用」（8 月 3 日）

共同研究

1. 地域結集型共同研究事業「閉鎖性海域における環境創生プロジェクト」
2. イオン環境財団助成「中国天津市における重金属土壌汚染が生態系に及ぼす影響の実態調査」

1.5　植田 栄二，UEDA Eiji

1.5.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

1．経営者の研究

現代社会において, 人々の生活に最も影響を与える組織体は企業である. 株式会社が私企業であっても企業の身勝手は許されず, 許容範囲での自由行動を営む認識が必要である. 株式会社の特質は, 出資者と経営者の機能的分離にあり, したがって, これを経営する主役は経営者である. 社会的責任を企業に結びつける考え方に対して, ここでは, 責任の所在を明確にするため経営者に結びつける考え方を主張したい. 株式会社の成長と共に経営者の倫理と責任の問題が浮上してきた.

2．社会的責任の研究

経営者に求められる社会的責任の意味を考えると, 基本的には企業の目的を達成すること, すなわち組織体の維持と成長を図ることである. ここで問題になるのは, 国際化・情報化社会を迎えて, 経営者の資質と考えられるものであり, 具体的には人間性の問題, 企業認識の問題, そして経営能力の問題などが問われるのである. 経営者が企業をどのように認識し, 企業の内外の環境変化に対してどのように的確に対応するかという能力が問題になる. 要約すると, 社会の目的や価値に照らして期待される経営方針を設定し, これを決定して実行する責任が経営者に課せられるのである.

3．その対象と内容の研究

社会的責任における「社会的」という表現のなかには 2 つの意味がある. 第 1 はその対象の問題であり, 第 2 はその期待にこたえるという内容の問題である. 前者については, 直接的には企業とかかわりをもつ利害関係集団に対するものであり, さらに拡大して社会全体や地球全体を包含するものである. 後者については, それぞれの立場から求められる精神的・物質的・経済的・社会的などの欲求を意味する. こうした視点から, 今日では, 自然環境の保全問題や人類の生存問題なども含めて, 善行的な意思決定と行動が経営者に求められる時代となった.

4．新しい責任論の研究—環境問題に注目して—

経営者の社会的責任を整理すると, 第 1 に企業の目的を達成すること. 第 2 に道義的・法律的に反する行為をしないこと. 第 3 に企業本来の目的にとどまらず, 人類にかかわる諸問題の解決に積極的に貢献し, 広く環境改善と向上に取り組み, 後世のためによりよい地球環境を真剣に考えるべきであるという「新しい責任論」の台頭である. 従業員の地域活動への参加, 各種機関への補助, 人類の福祉と繁栄のための研究開発, 自然環境保全への貢献などがこれである. 企業の評価基準として精神的価値に対応する「企業の社会的貢献度」が注目され, わたくしの当面の研究は経営者と環境問題を結びつけて考えることである.

発表論文・図書，作品

1. 『現代経営学（9 版）』，共著，同文館，2004 年 10 月

1.5.2　教育活動

専任科目

経営学，環境のための経営学，経営環境論 1, 2.

兼担科目

経営学原理（経済学部），経営学，経営管理論（総合政策学部）

兼任先 (担当科目)

名古屋産業大学大学院非常勤講師 (経営環境特論)

1.5.3　社会活動

学会委員

1. 実践経営学会理事
2. 日本環境共生学会監事

外部委員

1. 四日市市特別職報酬等審議会会長, 2005 年 2 月

1.6　大倉 克己，OHKURA Katsumi

1.6.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．歪みゲージ変位計による植物の環境ストレス診断

本研究は広島大学との共同研究である．茎や果実の形態的変化が数ミクロン精度で計測できる歪み計を用いて，茎や果実の径変化と環境ストレスの関係を調べている．これまで，いろいろな植物を用いて計測をしてきた．その結果，茎や果実の直径は，日中あるいは明所で収縮し，夜間あるいは暗所で膨張することが明らかになった．本年度は，ベトナムの酸性硫酸塩土壌に生育する熱帯樹種（アカシヤとユーカリ）を用いて，酸性土壌耐性に関する研究を行った．強い酸性土壌に生育できる植物は，一つには，アルミニウム（Al）ストレスに耐えうるものである．そこで，Acasia auriculiformis と Eucalyptus amaldulensis を養液栽培し，アルミニウム濃度の異なる養液（0, 1mM, 2mM）に移し，26 日間茎径変化の連続測定をした．養液アルミニウム濃度が高まると，両樹種ともに茎径肥大は低下したが，E. amaldulensis の低下程度は著しく大きかった．これより，A. auriculiformis の方がアルミニウム耐性度が高いと考えられる．事実，樹種体のアルミニウム含有率もアルミニウムの地上部移行量も E. amaldulensis でより高かった．以上のことから，歪みゲージ変位計を用いて茎の形態的変化を計測することにより，酸性硫酸塩土壌に適応する樹種の選抜やアルミニウム耐性度の比較が容易にできる可能性が十分あると考えられるので，今後は，他の樹種も用いて検討する予定である．

２．中国天津市おける重金属汚染土壌の植物修復

本研究は，北京大学環境学院，三重県科学振興センター保健環境研究部および四日市大学環境情報学部（武本，王，井岡，大倉）の三者による共同研究である．中国では，工業発展に伴う工業廃水や生活廃水による都市近郊での重金属土壌汚染が進行している．天津市街地近郊でも深刻な事態になりつつある．このように，重金属で汚染された土壌の面積が広い場合には，土壌を物理的，化学的に処理するのが困難であるので，植物修復 (Phytoremediation) の方が汚染除去には適していると考えられる．植物修復とは，重金属を高濃度に集積する植物を汚染土壌で栽培し，重金属を植物に速やかに吸収させるとともに葉・茎などに移行させ，植物を当該土壌から持ち出し，利用あるいは処理するものである．　本年度は，天津市郊外の小南河にあって，重金属汚染があると思われる農耕地の土壌を採取・輸入し，土壌中の重金属濃度を三重県保健環境研究部資源循環グループが分析した．分析の結果，水銀とカドミウムの濃度は日本の環境基準よりも低いが，天津市土壌全体の平均値より著しく高いことがわかった．そこで，今後は，水銀に注目して，水銀を多く吸収する植物の検索をすることにした．その農耕地で栽培されていたトウモロコシや自生していた雑草３種（日本のエノコロクサ，スベリヒユ，オナモミに似たもの）を採取して，植物体中の重金属濃度を資源循環グループが分析した．水銀濃度に関しては，トウモロコシの茎葉とスベリヒユに似たものがトウモロコシの実や他の雑草２種より高かったが，高濃度といえるほどのものではなかった．今後は，中国や日本のいろいろな植物を採取あるいは栽培して，水銀吸収の高いものを検索する予定である。

発表論文・図書，作品

1. Vermicomposting of Rice Straw and its Effects on Sorghum Growth. TROPICAL ECOLOGY 45(2) 1-5, 2004.（共著）
2. Plant Species and Soils Utilized as Famine Foods in Japan. Asian Agri-History に投稿（共著）

口頭発表・学術講演

1. 熱帯樹種の酸性土壌耐性に関する研究.　日本土壌肥料学会２００４度福岡大会，２００４年９月　１６日

1.6.2　教育活動

専任科目

環境生物学Ａ．環境生物学Ｂ．環境生化学．応用生物学．基礎セミナー．専門セミナー．卒業研究セミナー

特別な教育活動

1. AO 入試模擬講義　『土壌生物のはたらき』　講師　６月２６日
2. オープンキャンパス　実験　『酸性雨が土に降るとどうなるか？』講師　７月２５日
3. エネルギー環境教育フォーラム　四日市大学エネルギー教育研究会分科会　実験　『酸性雨が土に降るとどうなるか？』　講師　８月１９日
4. 四日市市民大学　実験　『酸性雨が土に降るとどうなるか？』　講師　１０月１４日

1.6.3　社会活動

共同研究

1. 活動テーマ：中国天津市にある重金属汚染の植物による浄化.　代表者：武本学部長共同研究者：中国北京大学環境学院（陶教授，曹講師），三重県科学振興センター保健環境研究部資源循環グループ（高橋リーダー，加藤，吉村研究員），　四日市大学環境情報学部（武本，王，井岡，大倉）助成元：(財) イオン環境財団

1.7　小川束，OGAWA Tsukane

1.7.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

1.『綴術算経』の研究・英訳・現代語訳

『綴術算経』は建部賢弘が享保 7 年（1722 年）に著し，後に将軍徳川吉宗に献上された数学書である．本書には小数第 41 までの円周率の計算（Romberg 法）や，円弧の長さの無限級数展開（Taylor 展開）を述べたものとしてつとに有名である．ここ数年の研究の成果として 2001 年度より森本光生先生（国際基督教大学）と本書の英訳を進めてきた．本年度は第 11 章まで完了した．日本数学に特有のテクニカルタームの英訳が困難を極め，来年度も主要な研究の一つである．また本書現代語訳の出版の機会もでき，来年度の課題となった．

2.『建部賢弘数学著作集』の編纂

本編纂事業は単なる著作集の出版ということにとどまらず，日本数学史におけるテキスト批判，解釈批判の刷新を目指すものである．本年度はテキストのディジタル化を進めた．

3．数学史京都セミナー

2003 年 10 月より始まった本セミナーでは Huygens, ”DeE Circuli Magnitudine Inventa Accedunt Problematum Quorundam Illustrium Constructiones”（1654）読了後，李冶『側円海鏡』（1248）の解読を始めた..

4．数学教育の研究

本年は環境論のための数学教育について研究を進めた．とくに社会系，文化系の学生にとって要求される数学の知識を整理し，過去の配布プリントなどをまとめて教科書の形にまとめることができた．

発表論文・図書，作品

1. 『環境理解のための数学』朝倉書店，2005 年 3 月．
2. 「建部賢弘の数学——とくに逆三角関数に関する三つの公式について」（森本光生先生と共著）『数学』第 56 巻第 3 号（2004 年 7 月），pp. 308–319.
3. ”The Mathematics of Takebe Katahiro——His Three Formulas of an Inverse Trigonometric Function” AMS（提出中）
4. 「狩野本『綴術算経』について」『京都大学数理解析研究所講究録』1392（2004 年 9 月），60–68.
5. 「株式相場の指標」（仮題）『数学文化』第 4 号，日本評論社（印刷中）.

6. 「相場における平均あれこれ」『石垣』（印刷中）

口頭発表・学術講演

1. 「ホイヘンスの円周率計算」数学教育の会（2004. 9，学習院大）.
2. 「建部賢弘と『算学啓蒙』」京都大学数理解析研究所研究集会（数学史の研究）（2004. 8，京大）.

1.7.2　教育活動

専任科目

基礎数学 a，ｂ，一変数の微分積分，二変数の微分積分，線型代数，環境数値解析 1，情報処理１（ハードウェア），プログラミング１.

兼任先 (担当科目)

特別な教育活動

1. 第 1 回けいはんなセミナー（京都大学理学研究科数学教室 21 世紀 COE 事業）（2004 年 2 月 18–21）セミナー指導.
2. 入試合格者事前指導「数学」(2004 年 3 月)

1.7.3　社会活動

学会委員

1. 日本数学協会理事.
2. 日本数学会「数学基礎論および歴史分科会」運営委員.
3. 和算研究所研究委員会委員.
4. Executive member of ”The Sixth International Symposium on the History of Mathematics and Mathematical Education Using Chinese Characters” (will be held at the Graduate School of Mathematical Sciences, The University of Tokyo on August 4–7, 2005) and organizer of the Special symposium ”Takebe Katahiro and the Traditional Chinese Mathematics”.

外部委員

1. 岩波数学辞典第 4 版数学史専門編集委員.

共同研究

1. 京都大学数理解析研究所「数学史の研究」共同利用研究者.

1.8　加納 光，KANO Hikaru

1.8.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

従来の現代中国語統語論研究は印欧諸語の分析方法をもとに進められてきた．しかしながら, 現代中国語は文法範疇と文法形式とが基本的に対応する印欧諸語とは大きく異なり，言語表現の対象である現象・事象・心象などといったコトガラを話し手あるいは書き手がどのように認識するのかによって文法形式が選択されたり，話し手あるいは書き手がコトガラ全体をどのように捉えているのかまたは一つの言語表現を構成する成分のうちどの成分を情報として取りたてるのかなどによって表現形式が選択されるという性格がより強い言語である．したがって，現代中国語の統語論研究はこの点を十分に踏まえて言語分析を行うことが重要であると考えられる．　今年度も上述の視点から中国語の談話分析を通し，現代中国語の様々な言語表現の発話のメカニズムを解明することにより，当該表現の機能上・用法上の働きを明らかにしていくことを中心とした研究を進めていきたいと考えている．

1.8.2　教育活動

専任科目

中国語コミュニケーション基礎，1，2，中国語講読表現，アジア文化論

兼任先 (担当科目)

愛知学院大学教養部 (中国語 1a・2b)

特別な教育活動

1. 基礎学力向上講座「国語」講師

1.9　北島 義信, KITAJIMA Gishin

1.9.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．西洋近代の価値観の再検討

西洋近代を人類の普遍的モデルとして捉える思考に対しては、第三世界のみならず欧米でも、批判的検討がなされるようになってきた。日本ではまだ充分に取り組まれていないこの問題について、私はアメリカ主導の「グローバリゼーション」の批判と平和実現にかかわる人間の主体的社会的活動の理論的根拠を親鸞の『顕浄土真実教行証文類』の「証文類」の分析（とりわけ、還相回向の分析、未浄心の菩薩の分析）を通じて明らかにすることを今年の課題としてきた。この課題は、浄土真宗教団における「アジア・太平洋戦争協力」の理論となった「真俗二諦論」の克服とも密接にかかわったものである。この課題は、民衆の主体化に大きな役割を果たしているイスラームの現代化やアフリカにおけるキリスト教の現代化とも共通項をもっている。この成果は 2005 年５月に発刊予定の『リーラー Vol.4, 浄土真宗と社会政治』（文理閣）に発表される。

２．アフリカ英語文学研究

アメリカ主導による政治・文化のグローバリゼーションの基本構造にあるのは、「欧米近代」の価値観の絶対化である。そこにおいて、政治と文化は不可分のものとなっている。それへの抵抗には、解放の神学、アフリカの状況神学、中東地域に顕著に見られるイスラム復興運動などが見られる。これらはいずれも、欧米近代の価値観の批判的検討と土着文化の融合が基礎になっている。ケニヤの出身の作家グギ・ワ・ジオンゴの小説『川をはさみて』（1965 年) は、この融合を通じて、支配に対する抵抗のあり方を示したものであり、地域は異なっていても「下からの抵抗のグローバリゼーション」という点では共通項をもっている。また欧米近代の価値観の継承すべき点は、土着文化の視点によってのみ明確となる。その視点は同時に、土着文化の「形態の固守」ではなく、その核心の現代化にもつながる。欧米近代の価値観と土着文化の価値観の底流に存在するものの共通項を把握し得た時、現代化の方向が見えて来るのである。グギ・ワ・ジオンゴが初めて民衆の言葉であるギクユ語で書いた長編小説『悪魔を磔刑に』(1980 年）は、このような現代的課題を 80 年代に提起した作品である。現在、上記作品を日本語に翻訳中であり、2005 年末には翻訳出版される予定である。

発表論文・図書，作品

1. 『親鸞復興』、同時代社、2004 年５月刊行
2. 「ナイジェリア社会とケン・サロ＝ウィワ」、『黒人研究の世界』所収（2004 年６月)、青磁書房

口頭発表・学術講演

1. 「『自然 (じねん)』と『いのち』」、2004 年現代と仏法を考える集い（真宗高田派教学院)、高田本山　　専修寺にて、2004 年８月 27 日

1.9.2　教育活動

専任科目

英語コミュニケーション基礎，英語コミュニケーション１，英語コミュニケーション２，英語講読表現１.

兼任先 (担当科目)

立命館大学（法学部・政策科学部・文学部・産業社会学部共通）「宗教と社会」

1.9.3　社会活動

学会委員

1. 黒人研究の会副代表
2. 地域文化学会理事
3. グローバル・ネットワーク 21 理事

講師

1. 真宗教団連合三重県支部中勢主催ブロック仏教公開講座：「現代における真宗寺院・僧侶の役割」（2004 年 3 月 17 日、高田本山専修寺にて）

1.10　木村 敬, KIMURA Takashi

1.10.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．現代情報メディアの変容と影響へのアプローチ

メデイア環境はデジタル技術の進展により，大きく転換して来ており，個的情報発信のもつ影響力は無視できないものとなってきている。このため，マスメディアの本来の役割も変容しつつあり，改めてジャーナリズムとしてのあり方が問われてきている。殊に放送メデイアは，ディジタル放送化の中で従来の公共放送（ＮＨＫ）・商業放送（民間放送）という枠組みに安住していられない環境変化が生まれつつあり，双方向性という個的対応が今後の鍵を握る状況にある．放送と通信の融合，メデイア間のボーダレス化，新しいコミュニケーションの出現など，メディアの変容はメディア教育の上で大きな影響をもつものであり，これを把握すべく，情報収集や事例研究を行った．

２．主体的なメディアリテラシー能力の育成

メディアが送り出す情報を正しく理解し，同時にこれを使いこなす能力を開発する「メデイアリテラシー」は，いまようやく日本でも様々な形で進められつつあるある．最大のポイントは，日本では「メディアリテラシー」がメディアの批判に終始しがちな点にあり，メディアへの不信を前提としては，これを使いこなす能力は育てられない．まず初めに自分を表現し，情報を伝達する手段としてメディアを「よいもの」「楽しい」ものとして理解させる必要がある．このため一年生を対象とした「メディアリテラシー」では，メディアの枠組み全体を理解させると同時に，如何に優れた，楽しい情報が制作され，流されているかを取り上げた．この結果，テレビ離れの現代の学生たちの殆どが，アンケートでは民放を見直した，あるいはＮＨＫを見直したと答えている．更に２年を対象とした「映像制作論」では，１００人の学生に実際の映像制作を行った．これは家庭用ではない本格的カメラをもち、撮影・編集を実施することで，表現とは何かを学び，メディアを内側から理解させること，即ちメディアリテラシーの最も実践的な教育手段を取ったことになろう．まず全員を８組のチームに分け、知らない者同士で何を作るか検討し，協力して撮影を行い，編集方針を話しあい，なんとかまとめあげた．最終講義で完成８作品を試写したところ，各作品がそれぞれ個性的で違った魅力をもつ作品に仕上がったことに，私を含め全員が驚きかつ感動した．１０月から１１月という季節，２時４０分からの４時限目の授業という，絶対的な条件下での撮影において，こうした成果が得られたのは，現代の学生たちの映像的感性の表れであり，表現を学ぶというリテラシーがもつ本来的な力によるものと言えよう。４年生のゼミにおいても，全員の意見により，学園としての特長を自由と捉え,「自由」をテーマとして四日市大学の紹介ビデオを制作することとした．全員で様々な「自由」の表現されたシーンを取材し，また「自由」に関する名言や自分たちにとっての「自由とは何か」を言葉として表現し、映像の中に組み込んだ．従ってこの作品は，四日市大学の広報ビデオとして企画したものでは決してないにも関わらず，結果的に学生たち自身が捉えた学園としての良さをアピールするものとなり，学生たちにも教師陣にもまた父兄にも好評をもって迎えられるものとなった．更に，本年１年間三重テレビの番組「わくどき」の中で，学生自身による大学キャンパスのリポートの時間が設けられ，その殆どをゼミ生の有志により制作した．これは市民参加のテレビ番組づくりとも考えられ，市民アクセスの実践として卒論にまとめさせることができた．

発表論文・図書，作品

1. 「６０周年を迎えた東京大空襲　–ドキュメンタリー番組「語り継ぐ東京大空襲」制作記録から–」四日市大学環境情報論集　第８巻第２号　2005.3
2. 「自由キャンパス・四日市大学」四日市大学紹介映像作品　VHS /DVD

1.10.2　教育活動

専任科目

専任科目「メデイア・リテラシー」　「映像制作論」「メディアコミュニケーション概論」「メディアコミュニケーション演習」基礎ゼミ（メデイアと映像表現），卒業研究セミナー

特別な教育活動

1. 県立久居農林高校における連携授業「情報環境とメディア」（１１月９日）
2. 岐阜県立森林文化アカデミー非常勤講師「プレゼンテーション論」(7 月-9 月)

1.10.3　社会活動

放送番組制作

東京メトロポリタン TV にて下記番組を制作

1. 「翔べ！世界のステージへ」オーストラリア・オペラ・スタジオ（６月１３日放送）
2. 「中国オペラ『楊貴妃』」（８月８日放送）
3. 「大正時代のボエーム」（１０月１６日放送）
4. 「第七回東京大薪能」（１１月７日放送）
5. 「南半球へ渡った能舞台」（１２月１８日放送）

1.11　黒島哲夫, Kuroshima Tetsuo

1.11.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

出版文化全般にわたる研究：

1. 出版文化全般にわたる研究：　講義「出版文化論」を構成する上での文献的な調査、資料の収集を継続的に行っている。特に、人類がメディアを使用し始めた頃の考古生態人類学的研究成果を著した文献類、記事類の収集、また、マルチメディアが浮上してきた 1980 年代から現在にかけて、出版という概念も大きく変貌してきており、この変貌する実状を克明に追跡し、記録することも重要な課題となっている。さらに、インターネット時代となり、個人の情報活動が多様化するなかで、発信する前に既存のメディア状況を点検して批評できる能力の開発が求められている。メディア・リテラシー・プログラムの体系化と教育現場への応用が急務となっている。以上を踏まえて、情報環境学の視点から、人類のメディア活動全般にわたるさまざまな局面、なかでも出版活動を文化論的、あるいはメディア・エコロジー的に解説するための思考実験を、講義内容の開発をとおして研究している。

2. マルチメディアオーサリング全般にわたる開発と研究：　電子出版セミナーを運営する上で求められる、各種アプリケーションへのアプローチ方法、デスクトップ環境からさまざまな素材やコンテンツを効率的に制作できるようになるための教育的なプロトコルの開発、教習者のレベルに応じた作品サンプルの作成、また既存の出版物やオンライン上に存在する各種マニュアル類の収集と教育現場への適用にあたっての検討などを、私設の研究ラボ（情報工房伽藍）を中心に進め、その成果を教育現場に移植している。2004 年度は、第４期生が創った「IMARGIN-DVD」を広く公開するための取り組みをした。メディア・コミュニケーション学科初年度入学生への配布や学園祭での上演会などを通して、メディアとしての訴求力や観客の反応を収集し、制作上の課題の整理作業を続けた。また、電子出版セミナー過去７年間の経過とその成果を、学部論集（タイトル：メディア教育にデジタル著述文化を導入するための理念およびその方法論について）に発表したことで、当セミナーの運営方針や取り組み方に対するポリシーを学生だけでなく、学内外に客観的に示せる機会となったことは、大きな成果であった。これらの成果を踏まえ、本年度も電子出版セミナーのフラッグシップメディアである iMargin の定期刊行化（雑誌か DVD）を追究する。また、デジタル・アニメーションやデジタル・ビデオ・クリップ、デジタル・ミュージックなどへの挑戦を、専門セミナーおよび卒業セミナーにおける最重点課題として押し進め、文字から映像やサウンドまでを含めた統合的なメディア制作時代のプロトタイプ創りに挑戦する。

3. メディア・リテラシー・プログラムの充実化：　社会全体がメディア化した状況下にあって、情報を発信することは当たり前になったとしても、その情報がいかなる社会性を帯びるのかと言った観点での点検はなかなか難しい。現在の日本においては、情報充満時代の「しつけ」ともいうべき教育が完全に欠落しており、簡単にネットストーカーを生んでしまったり、アダルト・コンテンツに手を染めてしまう状況が存在する。あるいは、引きこもり型の世代が自殺仲間と知り合うためにインターネットが活用されている。このようなネガティブな動きを知り、より客観的な態度でネット社会を防衛的に生き抜くためのメディア・リテラシー教育の開発は、大学における社会的責務である。そこで、2001 年度から出版メディア論２において、メディアを客観的に点検する課題として、特にインターネット・メディアに特化した

評価作業を継続的に進めてきた。2002 年度からは、より実践的な評価作業をシリーズでレポートさせ（メールでの提出：全５つの課題でのレポート）、受講生のレポートを受講生のみが閲覧できるセキュリティーを設けたＨＰに掲載し、受講生相互にレポートを閲覧できる状況下で授業を進めた。また、このような授業での実践的なメディア・リテラシー開発の成果をシリーズ化して論集に報告することが出来るようになり、四日市大学独自のメディア・リテラシー・プログラムの体系化の足がかりを築いた。さらに 2004 年度は、日本の新聞社が進めている情報の差別化対策の実態を検証するために、新聞社インターネットサイトに掲載される記事と誌面に掲載される同じ記事のコンテンツの精密な比較をさせた。

4. メディアミックス時代における新しいクリエーター像、新しいプロデューサー像の追求：　本学部メディア系の学生が卒業後、制作現場へ就職し、実際的な制作活動を開始するにあたって必要となるメディア・クリエーターとしてのビジョンを、明確に学生へ提示していく必要がある。そこで、これからのメディア・クリエーターに求められる諸条件を整理して、論理化していく。論理化すべき項目としては、ネッワーク社会対応型のコンテンツ・クリエーターとしての知識と技量の体系化、デジタルコンテンツのメディアミックス的運用における諸メディアへのアプローチ方法やコーディネーションをする上での方法論の確立である。そして最大の課題は、社会性を持ち得る情報のコーディネーションとはいかなるものかといったジャーナリスティックな価値観、あるいはマーケティング的な発想の問題である。電子出版セミナー卒業生の中には、コマーシャルフイルム制作現場、広告宣伝の印刷物を取り仕切るアートディレクター、あるいは雑誌の編集記者として、メディアの最前線で活躍しだした人材がいる。これらの卒業生の動向にたえず着目して、当大学で実施してきたメディア教育プログラムを検証するべき時節になっていることを、深く留意したい。

発表論文・図書，作品

1. IMARGIN-DVD「第４期生の挑戦」（２枚組）のプロデュース（メディアコミュニケーション学科初年度入学生への配布用バージョン）2004.3.

発行, 投稿した論文・図書

1. メディア教育にデジタル著述文化を導入するための理念およびその方法論について　第８巻第１号　2004 年９月

1.11.2　教育活動

専任科目

出版文化論, 出版メディア論１，出版メディア論２，基礎セミナー 1，2，専門セミナー，卒業研究セミナー/subsubsection>

1.12　杉田詔子，SUGITA, Shoko

1.12.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．Ｅ・Ｊ＝ダルクローズ音楽教育法（リトミック）—-即興演奏に関しての研究—-

ダルクローズが発想したリトミックという本来の意味は，古代ギリシァの心・身一体思想からの発想であり，また，ルソーが述べた「感じる心の育成」的発想からきているものである．即興は即に興す，つまり，すぐに演奏するということであるが，ルネサンス以前のモノトニックな音楽様式や古くから伝承されてきた地域特有の音楽（民族音楽）にみられるオスティナートなど，即興の歴史的な観点からみると，バロックの通奏低音は，即興の習慣を伝えている．教会のオルガニストにあって，ミサの進行に合わせてオルガンを即興演奏する能力が必須要件とされていたし，今日でもオルガンの教育課程にも即興演奏が含まれている．リトミック音楽教育における即興演奏は，一定コード進行による improvisation と殆どの束縛を解いた自由な即興演奏 free improvisation まで様々なスタイルをみることが出来る．そして，即興演奏するにはいろいろな方法，手順があると考えられる．そこで本年度は昨年度からの続きとして，ピアノ即興演奏の研究–2–の内容をまとめつつある．

２．民族（民俗）音楽における即興性についての研究

世界各地に根ざした音楽の多く，例えば伝承歌，民謡をはじめ，諸民族が独自に育んできた音楽の多くは，伝承性を基礎として発展されてきたし，その多くは即興的センスに支えられている，と考える．現在，尚　多く民俗に伝承されているが，一方その習慣は，記譜のほぼ完成された 17 世紀以降，調性の確立される丁度同じ頃を契機として著しく衰えていった．そのような即興行為の経緯などについても研究を進めている．

発表論文・図書，作品

1. リトミック教育におけるピアノ即興法について—非和声音の存在—四日市大学環境情報論集第 8 巻第 1 号 2004 年 9 月

1.12.2　教育活動

専任科目

音音楽史、音楽と表現、感性と創造、人間と文化 a、人間と文化 b

1.13　武本　行正，TAKEMOTO Yukimasa

1.13.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

1．ＳＯｘ、ＮＯｘ等の大気拡散の研究

現代社会において, 人々の生活に影響を与える大気汚染物質は各種あるが，四日市公害で喘息の原因となった SOx(硫黄酸化物) ならびに NOx に焦点をあてて被害予測をする．この基礎となる発生源量の推定と拡散計算を実行する．これまで用いてきた３次元の一般曲線座標系 (general curvilinear coordinate) の大気汚染濃度予測計算モデルでは，地面に起伏があったり，丘陵地帯や山脈がある場合，その地形に沿った計算ができる．このような場合 (四日市の場合は丘陵地帯がある) にはきわめて有効であるが，その反面，基礎式が複雑になり，簡単に取り扱うには不便である．平坦な地形の時は，３次元直交座標系 (3-dimensional Cartesian Coordinates) での大気汚染濃度計算モデルを用いた解析で十分であろう．そこで，３次元直交座標系での風速場と拡散場を交互に時間発展的に解く簡便なプログラムを開発した．そして，県・市・ＩＣＥＴＴと共同で調査研究を実施している，中国の天津市内にある発電所や工場からの排煙ならびに飲食店や家庭暖房からの SOx の拡散を (石炭使用量から) 想定して，着地濃度予測を行なった．また、NOx についてはゼミ生諸君と 24 時間暴露のパッシブサンプラーにて四日市地域の地上濃度測定を継続的に実施している。　さらに、中国内蒙古自治区の包頭市の大気環境改善策について、ICETT と共同で国際協力銀行の依頼により、現地調査・提言を実施した。

2．伊勢湾・英虞湾や有明海の海況の研究

伊勢湾は東京湾と並んで汚濁の進んだ海域で，その原因としては，湾口が狭く湾中央が盆状にへこんだ閉鎖的な構造のために外洋との海水交換が悪いこと，水平規模が約 50km であるのに比べて平均水深が約 20m と極端に浅水深であること，周辺に名古屋などの大都市を抱え汚濁負荷が大きいことが考えられる．そこで，大学独自の数値シミュレータを開発し，計算方法や乱れを表現するモデルなどの研究を進めること，また伊勢湾の流れ場の解析を実施して結果を公表してゆくことには意義が有ると考えた．現在，千葉教授と研究を進めているところである．また，有明海についても，諫早湾の干拓事業の問題とともに，海苔の深刻な色落ち・生育不良・病気など栄養障害の問題が 2000 年 11 月から 2001 年の 3 月まで発生した．そこで，湾の流況数値解析を行ない潮受け堤防の影響評価を現在千葉教授とともに行っている．さらに，英虞湾についても三重県との共同研究「閉鎖性海域における環境創生プロジェクト」に千葉，井岡　両先生とともに参加し，英虞湾の汚濁負荷量の算定を進めているところである．

3．水理学・海岸工学関連の研究

波高および流れ場と溶存酸素量（ＤＯ）の拡散場を交互に時間発展的に解くプログラムを開発したので，矩形の港湾における湾口部での潮位の変動（Ｍ２分潮）と湾内へ流入する流量一定の小河川を想定して，そのＤＯの拡散状況を把握すべく，テストランを実行した．なお，今回は塩分濃度や水温の変動は考慮せずに一定値を与えている．また，ＤＯの計算に際しても，海面の物理的な再曝気の項のみを評価し，植物・動物プランクトンや海草等による光合成や呼吸，代謝分解，底

面の泥との交換等については考慮していない．また，将来は，実際の観測データを加味し，光合成等の寄与をある程度把握してＤＯやＣＯＤ値の予測ができるようにしたいと考えている．また，ＤＯのボックスモデルで，英虞湾等のＤＯ生産量を把握できないか検討中である．　河川の局所流解析のために，2 次の非線形項を備えた非線形 k- ε モデルに基づいた計算方法を，バックステップまわりの乱流場の解析に適用した．モデルの係数はストレインパラメーターおよびローテーションパラメーターの関数として調節された．数値計算の結果は，現在の数値モデルが壁面に衝突したり，渦をまいて循環する領域近くの乱流エネルギーの過度の生産を抑えて，ステップのまわりの剥離および再付着領域のある 2 次元の複雑な乱流特性を再現することができたことを示している．この河川乱流場計算方法の開発は松江高専・木村助教授との共同研究である．

4．植物関連での水質・土質の改善や土壌汚染の調査

現在，赤塚植物園の開発した FFC 資材が，水の改質，土壌の改質，有用微生物の増殖などの作用により，水生動植物に対する有益な効果，植物生育の促進効果，植物鮮度保持効果などに現れていることが植物園，農家，養魚場などで報告されている．　本研究では，これらの観察された事例のうち，主に水質改善と植物生育促進について，より精確に検討する．そこで，水質の改善効果を具体的に調査・検討し，FFC 資材を用いなかったケースとの対照実験を行うものである．養液栽培の水稲・土耕栽培の水稲を用いた試験ならびに圃場条件下で水稲および畑作物を用いた試験において，それぞれたん水状態の場合は直接採水し，作土層や圃場の土壌からの溶液採取は減圧ポーラスカップ法により行うものとする．本調査研究は大倉教授との共同研究で行った．　また，中国の土壌汚染に関してもイオン環境財団から資金援助を受け、共同研究として北京大学の環境学院と協力して，天津市の郊外の圃場で実態調査研究を開始し、現在鋭意奮闘中である．特に、重金属汚染についてはにより、植物体に吸収させて土壌の改良をはかるべく、同定をしつつある。これの分析に関しては三重県・保健環境研究部と協力した研究でもある．

発表論文・図書，作品

1. Computation of Cavity Flow on Staggered Grid by Finite Spectral QUICK Scheme, Chinese Quartery of Mechanics, Vol.25, No.3,pp.386-391, Ting-wen Li, Jian-ping Wang and Yukimasa Takemoto (Sep.2004).

2. 「英虞湾集水域における汚濁負荷発生に関する点源と面源の調査」,『四日市大学環境情報論集』, Vol.8,No.1, 井岡幹博, 千葉賢, 武本行正 (2004 年 9 月 (1 頁～16 頁)）.

3. Analysis of Mass Transfer in a Inner Bay of Japan using the Box Model, 5th Asia Pacific Conf. on Sustainable Energy and Environmental Technologies, to be published, Wellington, NZ, Y.Takemoto, M.Ioka and S.Chiba (2005).

4. Effects of FFC(Ferrous Ferric Chloride) Products on Plant Growth, Intl. Symp. on FFC Technologies, to be published, K. Ohkura and Y.Takemoto (2005).

5. Experimental Research for Promotion of the Vegetation by the FFC Material and Its Improvement Effect for Water Quality and Property of Soil, Intl. Symp. on FFC Technologies, to be published, Y.Takemoto and K. Ohkura (2005).

1.13.2　教育活動

専任科目

環境特殊講義（とりまとめ），環境のための基礎生物，環境工学，コンピュータシミュレーションと同演習，環境数値解析２（環境情報学部）

兼任先 (担当科目)

1. 情報科学概論（三重大学共通教育）
2. 情報数学要論（三重大学教育学部）
3. 環境学（四日市市立四日市高等看護学院）

1.13.3　社会活動

学会委員

1. 核融合科学研究所共同研究員、核融合学会代議員
2. 土木学会応用力学委員会・乱流研究小委員会委員
3. 雨水資源化システム学会評議員
4. 流体力学会年会 2004,2005 環境流体

外部委員

1. APEC 環境技術交流促進事業運営協議会会員
2. 三重県環境審議会土壌汚染対策部会部会長
3. 三重県自動車排出窒素酸化物等総量削減計画策定協議会幹事会委員
4. みえ新産業創造交流会（環境分野）部会員
5. 伊勢湾学セミナー設置運営懇談会委員
6. みえサイエンス・アカデミー代表者会議常任委員
7. 地域研究開発促進拠点支援事業（ＲＳＰ事業）に係る成果活用促進会議委員
8. 三重県との共同研究「閉鎖性海域における環境創生プロジェクト」共同研究推進委員
9. いなべ市環境審議会・水道水源保護審議会委員

1.14　田中 伊知郎，TANAKA Ichirou

1.14.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．人類にいたる社会的伝達の進化

親から子へ直接物質として渡される DNA 以外の手段によって，世代を越えて情報を伝達する (以下社会的伝達と呼ぶ) は人類の重要な特徴であり，人類の進化に伴い発展してきた．この進化的問題を解明するため，人類に近縁な霊長類を対象として研究を行った．より自然に近い物を対象とするため，飼育下の実験でなく，野外のニホンザル (長野県志賀高原の地獄谷野猿公苑) を対象にした観察研究を行った.

観察の結果，行動の獲得過程の母子交渉において、子供の行動パターンの差により母親の行動が変化することが観察された. コドモが行動を続けることができなくなる母親の行動が引き起こることにより, その行動をコドモが後に行わなくなると示唆された。従来の研究では見逃されてきた母親の微妙な行動の違いが, 子供の行動獲得・形成に効果を及ぼすとわかり, 現在研究を継続している.

２．霊長類における授乳と母子の絆

授乳行動の観察データを整理し，母子の初期の絆に関する論文を執筆し，英文誌に発表した．この冬からその発展的研究の予備調査を開始した.

発表論文・図書，作品

1. Ichirou, Tanaka. 2004. Non-offspring nursing by a nulliparous pregnant female just before her first parturition in free-ranging Japanese macaques. Primates, 45: 205-206

口頭発表・学術講演

1. ニホンザルにおける母子の共同注視がシラミ卵取りの発達に及ぼす効果，田中伊知郎，第 20 回日本霊長類学会大会，犬山：京都大学霊長類研究所，2004 年 7 月
2. ニホンザル一歳児は近親者以外の乳首を避ける，田中伊知郎，第 58 回日本人類学会大会，長崎市:長崎大学医学部 2004 年 11 月

1.14.2　教育活動

専任科目

環境心理学・環境英語・環境のための基礎化学・環境化学計算・環境情報学概論 1・環境情報学概論 2・基礎セミナー 1・基礎セミナー 2・専門セミナー

1.14.3　社会活動

学会委員

1. 日本人類学会評議員

講師

1. 四日市大学出張講座,「縄文時代の植生変化と生活」＆「生物学からみた学習」，三重県立飯南高等学校（2004.6.24）
2. 四日市大学出張講座，縄文時代の植物環境と人々の生活の変化，三重県立名張西高校（2004.10.6）
3. 四日市大学出張講座，遺伝子と進化，私立暁高等学校（2004.10.16）

1.15　田中　正明, TANAKA Masaaki

1.15.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

本年度の調査, 研究の目的と概要

1. 湖沼のプランクトン相, 或いは河川の付着藻類の分類学的な研究を中心にして, これらの種類或いは群集が有している水質汚濁や富栄養化等の指標性を検討し，類型化を計った.
2. 共同研究として, 皇居の動物相調査の中で原生動物から甲殻類に至るミクロ動物の分類を分担した．また同様の共同研究として赤坂御用地及び常陸宮邸の庭園池沼の生物相調査も分担した.
3. 三重県内の河川及び湖沼の生物相と水質の現状把握を目的に, 一斉調査を実施し、水生生物の分布図及び生物指標による水質階級地図を作成した.

本年度のゼミの取り組みと概要

本ゼミにおいては, 顕微鏡一つを武器として環境問題と取り組むというスローガンに, 湖沼や河川の生物相の把握や水質判定, さらに処理方法の検討等に取り組んでいる.

また資格の取得として, 生物分類技能検定或いは公害防止管理者を目指しており, 各々の学生に実際の共同研究の一部を分担させることでより理解を深め, 興味をせ, その後の質の高い卒業論文の作成にもつながるよう努めた.

発表論文・図書，作品

1. プランクトンから見た本邦湖沼の富栄養化, 第 324 報-第 335 報, 水, 第 46-5 巻, 第 639 号-第 46-4 巻, 第 669 号（12 報文）
2. 白駒池の珪藻類, 四日市大学環境情報論集, 第 8 巻, 第 1 号, 61-86
3. 荒沼 (青森県）の珪藻類、Diatom (日本珪藻学会)、第 20 巻、223-27
4. 日本湖沼誌 II. プランクトンから見た富栄養化の現状。1-396、名古屋大学出版会、名古屋

口頭発表・学術講演

1. 深見池の珪藻植生 (共著）, 日本珪藻学会第２６回大会, ２００４年 5 月, 筑波市
2. 熊野灘沿岸の海跡湖諏訪池の珪藻類 (共著), 日本珪藻学会第２６回大会, ２００４年５月, 筑波市
3. Long　term dynamics of diatom in lake Fukami-ike.(共著)、18th International Diatom Symposium ２００４年９月, ポーランド

1.15.2　教育活動

専任科目

生態学, 陸水学, 海洋環境学, 森林学, 基礎セミナー, 専門セミナー,
卒業研究セミナー

1.15.3　社会活動

学会委員

1. 日本河川湖沼研究会会長
2. 日本珪藻学会運営委員

外部委員

1. 国土交通省ダム発電放流量検討委員会委員
2. 四日市市ごみ減量等推進審議会会長
3. 愛知県環境創造センター理事

1.16　千葉 賢，CHIBA Satoshi

1.16.1　研究活動

本年度の研究課題

１．英虞湾の環境動態の研究

これまで，伊勢湾，名古屋港，有明海などの閉鎖性海域の流動特性を研究課題としてきたが，三重県地域結集型共同研究事業「閉鎖性海域の環境創生プロジェクト」の立ち上げに伴い，英虞湾の環境動態の研究を中心に据えた．この研究事業は閉鎖性海域の環境浄化を図るもので，具体的には英虞湾を対象にして活動を展開し，その成果を他の閉鎖性海域の環境浄化に役立てるという目的を持っている．平成 14 年からの 5ヵ年計画で，単年度に 5 億円近い研究予算が投入される．この研究事業では，実際に地域と連携しながら環境浄化に取り組むことが求められ，自分の専門外である観測や水質分析などにも深く係わる必要がある．自分の研究を社会に還元できる機会であり，また研究活動の幅を広げる良い機会でもあるため，当面は英虞湾の研究を中心に据えることにした．この事業は次の 3 つの研究テーマに分かれている．

1. 沿岸環境創生技術の開発
2. 底質改善技術の開発
3. 環境動態シミュレーションモデルの開発

この中の研究テーマ 3「環境動態シミュレーションモデルの開発」に関して大役であるが研究リーダを務めることになった．専門外の内容も多く含まれるため，他の研究者と協力し，補完しあって研究を進め，社会に役立つ成果を残したいと考えている．この事業の中での自己の研究課題は次の通りである．

- 英虞湾集水域からの汚濁負荷の研究（水質調査，集水域の面源・点源負荷の把握，負荷量算出プログラムの開発等）（岐阜大・篠田教授，四日市大・井岡助教授との共同研究）
- 英虞湾の流動特性の研究（水質調査，3 次元流動モデルの開発等）（松江高専・木村助教授との共同研究）
- 英虞湾の物質循環特性の研究（水質モデル，底質モデルの開発等、四日市大・田中正明教授との共同研究）

事業の最初の 2 年間がほぼ終了し，多数の観測データが集まってきた．現在はデータを整理して，湾の海水交換特性，物質循環特性等の検討を行っている．平成 17 年度は基礎生産量調査，底質調査などが中心になる予定である．

２．有明海の 3 次元水質シミュレーション

平成 15 年度から九州大学の小松利光教授を中心とする有明プロジェクト「科学研究費補助金基盤研究 (A)(1) 有明海の流れ構造の解明と蘇生・再生のための調査研究」に加わり，有明海の一斉調査にも参加した．自分の担当分野として 3 次元水質シミュレーションの実施が求められているが，英虞湾の研究負担が大きく，あまり役に立つ仕事が出来ていない．英虞湾の流動・水質・底質モデ

ルが本格的に動き出せば，それを有明海に適用することは可能であり，少し時間は遅れるが，いずれ有明海の解析作業にも着手したいと考えている．

発表論文

1. 英虞湾の海水交換に関する研究 1 ―走行型 ADCP を用いた流動観測―，千葉賢，奥村宏征，西川次寿，山形陽一，四日市大学環境情報論集，第 8 巻，第 1 号，2004，39-60
2. 海底堆積物の物質循環モデルに関する基礎的研究，千葉賢，四日市大学環境情報論集，第 8 巻，第 1 号，2004，17-37
3. 英虞湾集水域における汚濁負荷発生に関する点源と面源の調査，井岡幹博，千葉賢，武本行正，四日市大学環境情報論集，第 8 巻，第 1 号，2004，1-16
4. 英虞湾の海底設置型 ADCP のオンライン化に関する有効性の研究，千葉賢，山形陽一，四日市大学環境情報論集，第 8 巻，第 2 号，2004（印刷中）
5. 北部有明海における流動・成層構造の大規模現地観測，小松利光，矢野真一郎，千葉賢ら，海岸工学論文集，第 51 巻，2004，土木学会，341-345
6. 有明海における流況制御ブロックの海水交換促進効果の検討，矢野真一郎，田井明，千葉賢ら，水工学講演会論文集，第 49 巻，2004，土木学会
7. 密度混合流解析への移動一般曲線座標モデルの適用に関する二，三の検討，木村一郎，千葉賢，小畑めぐみ，細田尚，水工学講演会論文集，第 49 巻，2004，土木学会

口頭発表

1. 混合密度流に対する各種スキームの適用性，木村一郎，千葉賢，日本流体力学会年会 2004，平成 16 年 8 月
2. 環境動態シミュレーションモデルの開発，千葉賢，三重県地域結集型共同研究事業「閉鎖性海域の環境創生プロジェクト」平成 16 年度研究成果発表会（アスト津、公開），平成 16 年 11 月
3. 環境モニタリングシステムの観測データから見出された英虞湾の海洋特性，千葉賢，英虞湾の再生を考えるシンポジウム 2005，志摩郡阿児町，2005 年，2 月

1.16.2　教育活動

専任科目

コンピュータ科学，プログラミング 2，情報処理 1，環境情報学概論 1・2，基礎セミナー 1・2，専門セミナー，卒業研究セミナー

特別な教育活動

情報科学部顧問，女子サッカー部顧問

1.16.3　社会活動

学会委員

1. 水環境学会中部支部理事
2. 日本流体力学会 2004 年会オーガナイザー

外部委員

1. 三重県産業支援センター地域研究開発促進拠点支援事業「事業推進協議会」委員
2. 三重県産業支援センター地域結集型共同研究事業共同研究推進委員会委員
3. 科学技術交流財団（愛知県）河川環境情報ネットワーク研究会委員
4. 中部空港調査会（国土交通省）伊勢湾環境情報検討委員会委員

講師

1. 四日市市民大学（講義題目：伊勢湾の環境）（平成 16 年 10 月 7 日）

1.17　都島　功，TSUSHIMA Isao

1.17.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．エレクトロニック・コマース（EC）時代のビジネスシステムの研究

本年度は、携帯ビジネスに関し、その市場、ビジネスツールとしての携帯電話の使われ方、携帯ビジネスによって変わる生活、今後の方向について考察した．また、ますます盛んになっているネットオークションに関し、３大オークションの特徴、トラブルの現状、買い手、売り手の立場からのトラブル対策について調査、考察した．

２．サプライチェーン・マネージメントの研究

メーカー、卸売り業、小売業が連携して、その供給連鎖のなかで、効率的な商品管理、物流管理、顧客管理を実現しようとするサプライチェーン・マネージメント・システムが注目され、成功例がかなり出てきている．その成功要因を抽出するため、成功事例の分析を行っている。

発表論文・図書，作品

1. 離散システムの同定手法，四日市大学環境情報論集，第 8 巻第 2 号，2004 年 3 月

1.17.2　教育活動

専任科目

データ統計処理，e-コマース，企業情報システム論，情報処理技術ｂ，現代情報科学，基礎セミナー１，基礎セミナー２，専門セミナー，卒業研究セミナー

特別な教育活動

1. 推薦入試 A 日程　ミニ講義理解力コース講師　2004 年 11 月
2. 2004 年度　四日市大学基礎学力向上向上口座　数学講師
3. 自動車部顧問

1.17.3　社会活動

学会委員

1. 日本ロジスティクスシステム学会評議員

講師

1. 出張講座，久居農林高校,「コンピュータと経営」，2004 年 6 月 22 日

1.18　豊島　政実，TOYOSHIMA　Masami

1.18.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．スタジオ，ホールの音響設計の研究

制作現場としてのスタジオの設計，測定及び評価-

- 昨年設計・完成したワーナーマスタリングスタジオに引き続き、輸入商社 (株式会社) ヘビームーンが計画している Pro Tools をフューチャーしたサラウンドスタジオを設計・２月完成詳細を専門誌サウンドにて報告
- モスクワ・カルチャーセンターの音響設計——モスクワ市に新設された 2000 人のモスクワ・カルチャーセンター・コンサートホールに隣接するスタジオ郡の設計
- シンガポール Pavane Recording Studio の設計

２．映画の音響の研究

DVD、映画音声制作用サラウンド音響の研究—-わが国初の音楽によるＤＶＤサラウンドシステムセッティング用 DVD の技術監修

３．ハイパーソニックの研究

熱帯雨林に代表される自然音に豊富に含まれる超音波成分はヒトをリラックスさせる．超音波を含んだ再生音による町の活性化を国際科学技術振興財団と共同研究，フィジビリティースタディを終了．フィールドスタディーとして彦根市に展開を計画、基点となるハイパーソニックササウンドスタジオを設計・建設中

発表論文・図書，作品

1. 音響協会誌　JAS ジャーナル　特集デジタル時代の音響について監修　４月
2. MUSIC MAN リレー対談　７月　URL：http://www.musicman-net.com/
3. サウンドクルーレコーディングスタジオ　２月完成
4. ヘビームーンスタジオ　３月完成
5. 高密度メディア　ハイパーソニックサウンド　フィールドスタディー用スタジオの設計　彦根市に計画
6. モスクワ　レッドヒルカルチャーセンター　スタジオ郡設計
7. ヘビームーンスタジオの音響設計　サウンド誌

口頭発表・学術講演

1. 韓国　Guandong　Univ. にて　メディア教育について情報交換　３月
2. Knowledge Hub Pre BCA 2005 11 Jan. at Singapore

1.18.2　教育活動

専任科目

音楽環境論１，２，イベント制作論，基礎セミナー 1，2，専門セミナー，卒業研究セミナー

特別な教育活動

1. ゼミ生による四日市市諏訪公園ライブ PA.　８月
2. ゼミ生による諏訪公園ライトアップ PA 11 月から２月
3. 音響ゼミにおいてプロのレコーディング，ＣＤ制作実習

1.18.3　社会活動

外部委員

1. 音響家協会評議委員
2. 音響コンサルタント協会副会長
3. 日本オーディオ協会編集委員
4. 川崎市情報推進事業構想推進委員会　委員長
5. 日本音楽スタジオ協会理事

講師

1. 録音の歴史　サウンドビレッジ
2. 四日市大学コミュニティーカレッジ　”レコーディングについて”
3. 四日市大学雑学祭　”CD ができるまで”

学術論文以外の発表

1. ”アビーロードへの道”　四日市大学学報　　４５巻

共同研究

1. 「脳にやさしい街づくりのための超高密度メディア技術の研究開発」　国際科学技術振興財団

その他

1. 梅紳の CD　”ひだまり虹色”ディレクション，大学発ベンチャー，ＹＵＭＥレーベルとして制作

1.19　中西 紀夫，NAKANISHI Norio

1.19.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

前年度からとくに注目してきた産業廃棄物対策を強化する廃棄物処理法改正案の全容が明らかになった。廃棄物管理票 (マニフェスト) 制度違反に最高で懲役６ヵ月を導入するほか、無許可業者の罰金は最高１億円とし、外交問題にも発展しかねない海外への不法な廃棄物輸出に未遂罪を新設、水際で摘発できるようになるとのことである。　また、2005 年 2 月 16 日から「京都議定書」が発効され、温暖化防止へ歴史的一歩を踏み出すこととなった。さらに、ISO14001 規格も 1996 年版から 2004 年版に移行する等、行政のみならず企業等でも、たいへんな対応がせまられることになった。　以上のことから、本年度は実践的な法処理に重点を置いた研究を中心に進めていくことになる。

1.19.2　教育活動

専任科目

法学，環境のための法学，環境法，環境マネジメント法，基礎セミナー１・２，専門セミナー，卒業研究セミナー

兼担科目 (担当科目)

経済法 a・b(経済学部)

特別な教育活動

1. 2004 年度四日市大学基礎学力講座　英語講師
2. 北海道 (小樽・札幌) セミナー研修引率 2004 年８月 29 日～31 日
3. 出張講座、飯南高校「環境と法」2004 年６月３日

1.19.3　社会活動

学会委員

1. 日本ビジネス学会理事

外部委員

1. 四日市市 EMS 内部環境監査員

その他

1. 本学の ISO14001 内部環境監査員として活動
2. 四日市大学情報セキュリティ検討会委員 (2005 年１月 13 日～現在に至る)
3. 四日市大学雑学祭実行委員会委員 (2004 年５月 20 日～2004 年８月 22 日)
4. 暁高校文化祭での四日市大学展示会の環境情報学部会場案内係を担当 (2004 年９月 17 日)

1.20　新田 義孝，NITTA Yoshitaka

1.20.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

豪州のアルカリ土壌改良を石炭火力発電所から発生する脱硫石膏でおこなった。　さらに、日本の石炭火力発電所から得られるアルカリ性の石炭灰を原料として土壌改良材を作り、これによって酸性土壌を中和して植林を可能にすることを目的に研究を立ち上げた。（なお、以上の研究開発は（財）電力中央研究所において新田が主となり実施しているもので、アルカリ土壌改良のプロジェクトは北陸電力とのクィーンズランドとの、酸性土壌改良についてはクィーンズランド大学と電力中央研究所との共同研究である。）

１．石炭火力発電所の副産物を利用した豪州の土壌改良

脱硫石膏を用いてアルカリ土壌を改良して、植林を可能にする実証実験が４年を経過し、樹木は５メートル以上に育つことを確認した。また、脱硫石膏の施用により、アルカリ土壌の特徴である土壌の微粒子化が改善され、団粒構造になることを確認した。また、石炭灰土壌改良材を作り、これによる酸性土壌の中和とともに微量成分の補給も行うことによって豪州の酸性土壌改良を行い、劣化した林地に植林を可能にするというコンセプトの実証に向けて、化学分析で見通しを得た。

発表論文・図書，作品

1. 「ドリーム・プロジェクト」新田義孝著エネルギーフォーラム社 208 ページ，2004 年２月.
2. 「２１世紀改造」新田義孝著　北星堂書店　２２２ページ　２００４年６月

1.20.2　教育活動

専任科目

地球環境論１，２，資源エネルギー論１，２，専門セミナー，卒業研究セミナー

兼任先 (担当科目)

（財）電力中央研究所 (理事待遇)、豪州クィーンズランド大学（Adjunct Prof.）

特別な教育活動

1. 第３回環境スクール（クィーンズランド大学にて）２００４．８．１６－３０

1.20.3　社会活動

学会委員

1. 日本マクロエンジニアリング学会理事長

外部委員

1. （財）ファインセラミックスセンター　企画運営委員
2. 日本産業協会消費生活アドバイザー委員
3. エネルギー・環境教育情報センター委員

講師

1. 近畿大学原子力研究所主催　エネルギー・環境教育セミナー「エネルギー・環境教育を通して考える力を養う」０４．１１．２８（大阪）
2. 超学際セミナー「会津の自然を考えた環境と自然エネルギー」　０４．１１．２７（会津大学）
3. 時事通信社掛川支部講演会「地球環境問題とエネルギー」　０４．１１．３０（掛川市生涯学習センター）
4. 原子力懇談会三重支部主催　エネルギー・環境研究会みえ　「環境とエネルギー」０４．１０．２（津市商工会議所）
5. エネルギー・環境教育情報センター主催　エネルギー教育コーディネーター養成研修会「環境とエネルギーから我々の選択肢を考える」０４．７．１６（東京）
6. 地球環境財団６月研究会「環境とエネルギーから我々選択肢を考える」０４．６．２２（東京）

1.21　波多野 憲男, HATANO Norio

1.21.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．都市農村計画論について

都市と農村が競合する都市郊外における土地利用計画のあり方に関する研究は、私の一貫した研究テーマである．都市計画と農村計画と区別するのではなく、都市農村計画とする計画概念の確立が必要であり、以下のような課題を抱え研究領域は広い.

1. 都市と農村の「共生」関係を具体的に提示する課題
2. 都市と農村との関係を調整する計画手法や計画技術の提案などを検討する課題
3. 国土法、都市計画法、農振法などを都市農村を包括する土地利用計画制度として体系的に検討する課題
4. 「サスティナブル・デベロップメント」や成長管理の計画論、地方分権の潮流、NPO やパートナーシップ等の参加主体の動向などを踏まえて、計画理念を検討する課題

この研究の一環として、日本建築学会ラーバンデザイン小委員会の活動や農村計画学科２００４年度秋季シンポジウム『都市と農村の共生を目指した「生活創造圏」のあり方』の大会実行委員長を務めた。

２．四日市市の都市構造に関する研究

足元の地域をフイールドとした研究は、都市計画研究姿勢としても学生教育の点でも大切だと考えている．その意味で「四日市の都市構造に関する研究」を四日市大学就任以来進めている．特に、四日市公害を都市計画論的に研究することを課題とし、四日市の工業都市としての建設が始まった戦前の地方都市計画委員会の四日市都市計画臨海土地区画整理計画、今の中心市街地の構造を決定付けた戦災復興土地区画整理の計画、石油コンビナートを中心とした都市形成に影響をもたらした 1960 年の四日市総合開発計画の構想、に関する資料を収集し、分析している．四日市の中心市街地は戦災復興土地区画整理事業で整備されているが、近年中心市街地としての活力が停滞しており、まちづくりの課題となっている．ゼミ演習では引き続き四日市市の中心市街地問題を取り上げているが、ゼミ生の関心は各地の主要都市の中心市街地に拡大して来ている。

発表論文・図書，作品

1. 農村計画学会 2004 年度秋季シンポジウム『都市と農村の共生を目指した「生活創造圏」のあり方』大会実行委員長

1.21.2　教育活動

専任科目

都市計画論 a，都市計画論 b，地域開発と環境，都市活動と環境，環境情報学概論 1，基礎ゼミ（居住環境と都市計画），専門ゼミ (居住環境と都市計画)，卒論ゼミ（居住環境と都市計画）

兼任先 (担当科目)

津市立三重短期大学 (生活環境論)

特別な教育活動

1. AO 事前指導「論文講読・論文作成」

1.21.3　社会活動

学会委員

1. 日本建築学会ラーバンデザイン小委員会
2. 日本建築学会地域共生小委員会
3. 日本建築学会東海支部都市計画委員会

外部委員

1. 四日市市開発審査会会長
2. 三重県開発審査会委員
3. 県道鈴鹿環状線住民参加型みちづくり実行委員会委員長
4. 三重県都市マスタープラン検討委員会委員

講師

1. 四日市市立四日市高等看護学院『四日市の都市形成と公害』

共同研究

1. 区画整理研究 NPO 法人区画整理・再開発対策全国連絡会議
2. 都市計画研究会 NPO 法人日野・市民自治研究所

1.22　播磨　良紀，HARIMA Yoshinori

1.22.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

1. 織豊政治史期の政治史研究　日本の中世から近世の移行期の特質を明らかにするため，当時期に登場した織田・豊臣政権を対象とした政治史を研究課題としている．特に豊臣政権の政治構造を研究を課題としている．　本年度は豊臣秀吉の文書様式論に関する研究を行なった．発表論文・図書，作品１は，秀吉の権力形成期に登場した朱印使用についての意義を論じたものである．膨大な薄礼化・尊大化された朱印状を発給することによって支配を進めた秀吉の朱印使用は、天正 12 年 (1584) から本格的に始まり、当初は朱印と花押を混在して用いていた．従来使用区別については不明とされていたが．朱印は小牧・長久手の戦いに関わって使用され，陣触・陣中見舞礼状・在地への命令に用いられ．さらに家臣への軍事指令でも戦いの進展とともに花押から朱印へと移行したことを述べた．

2. 織豊政権期の地域史研究　織豊政権の地域的な政治展開を究明するため，畿内及び近国地域を研究対象としていて研究を進めている．そういった関係もあり、『愛知県史』・『亀山市史』などの自治体史編さんにも関わっている．　本年度は，織田信長の長島一向一揆攻めに関する研究を行なった．発表論文・図書２は，作品大坂本願寺の命により蜂起した長島一向一揆織田信長の戦いの展開から，一揆の構成，また信長の一揆虐殺の意味を論じた．一揆は真宗門徒や北伊勢国人ばかりでなく、尾張西南部・南美濃の在地領主、特に水上交通従事者なども参加した複合的な組織であったことを述べ、従来いわれているように，虐殺は信長の残虐性に求められるものでなく，赦免を翻した一揆への見せしめ的要素が強いことを指摘した．

3. 紀州地域史研究　２の織豊政権期の地域史研究を進めるうえで，同時期に関わらず紀伊国の特質を追究するため研究を進めている．そうした関係もあり,『古座町史』・『熊野川町史』などの和歌山県の自治体史編さんにも参加している．　本年度は，和歌山市東部に位置する紀伊国一宮である日前・国懸宮の神宮領の検注帳を史料紹介した．発表論文・図書，作品３・４は，永仁３年（1295）の神宮郷吉田郷と秋月郷の検注帳を紹介したものである．検注帳は荘園領主が支配のための土地帳簿で，倉末期の土地領有関係や年貢収取関係を知る上で貴重な史料であることを示した．

4. その他　発表論文・図書，作品５は，ここ数年つづけている連載の史料紹介で，四日市市立博物館の市民ボランティアの方々が解読された同館所蔵の「四日市宿清水本陣文書」を添削・校訂したもので，併せて同文書の解説も執筆している．

発表論文・図書，作品

1. 「秀吉文書と戦争–小牧・長久手の戦いを中心に–」（『近世成立期大規模戦争と幕藩体制–占領・国分・仕置の視点から–』2001-2004 年度（平成 13-16）文部科学省科学研究費』補助金　基盤研究（A）(1)、２ 005 年 3 月刊行予定）

2. 「長島一向一揆と尾張」（『愛知県史研究』第 9 号、2005 年 3 月刊行予定）

3. 「中世紀伊国の土地関係史料 (一)」（『四日市大学環境情報学部論集』第 8 巻第 1 号、2004 年 9 月）

4. 「中世紀伊国の土地関係史料 (二)」(『四日市大学環境情報学部論集』第 8 巻第 1 号、2005 年 3 月刊行予定)

5. 四博古文書会「四日市宿　清水本陣文書（六)」(『四日市市立博物館紀要』第 11 号，2004 年 3 月）監修・校訂

口頭発表・学術講演

1. 「戦争と文書発給–小牧・長久手の戦いと秀吉文書–」，科研研究会（近世成立期大規模戦争と幕藩体制–占領・国分・仕置の視点から–)，国民宿舎余呉湖荘，2004 年 8 月 28 日

2. 「織田信長と長島一向一揆」三重大学歴史研究会大会講演，2005 年 1 月 22 日

1.22.2　教育活動

専任科目

環境情報学特殊講義，環境情報学概論 1，環境情報学概論 2，環境史，基礎セミナー 1，基礎セミナー 2，専門セミナー，卒業研究セミナー

兼任先（担当科目）

愛知学院大学（地域史特講１Ｃ)，四日市市立高等看護学院（環境論）

特別な教育活動

ＡＯ入試合格者事前指導「論文購読・論文作成」

1.22.3　社会活動

学会委員

1. 織豊期研究会幹事・編集担当・会計担当

外部委員

1. 四日市市立博物館評議員

2. 愛知県史織豊部会専門委員

3. 亀山市史歴史合同部会古代中世部会執筆委員

4. 古座町史編纂委員

5. 熊野川町史通史編執筆委員

講師

1. 四日市大学出張講座「むかしの環境問題」，三重県立飯南高校，2004 年 5 月 13 日 17 日
2. 四日市大学フェスティバル雑学祭講師「豊臣秀吉のへぇ～？」，四日市大学，2003 年 8 月 22 日
3. 出張講座「むかしの環境問題」，三重県立四日市農芸高校，2004 年１１月 30 日

1.23 Eric Bray

1.23.1 研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

This year I worked in a variety of areas. My main area of focus was to look at how technology is being used in Japan in higher education. I'm interested in how the use of technology in education might be influenced by cultural factors. Particularly, I would like to see how distance education might evolve in Japan. In terms of my teaching, I have worked to complete a textbook for intermediate English students. I look forward to trying it out with Yokkaichi University students this coming year. In my seminar classes this was the first year for students to compete a graduation project. Students were encouraged to choose topics that they found interesting. The final result was 4 papers on: Homeless Children, Child Abuse, Ecological problems of Okinawa and the Great Barrier Reef. Students not only learned about the topics they choose to study but also improved with their English.

発表論文・図書，作品

1. ”Current Issues in Online Distance Education” Yokkaichi University Journal of Environmental and Information Sciences. Vol. 8, 2005
2. ”The Use of Information Technology in Japanese Higher Education: A Pilot Study” . Edu-Com 2004 Conference Proceedings pp. 294-311
3. ”Print Materials and Traditional Classrooms in the Cyberworld ” Asian Quarterly. An International Journal of Contemporary Issues. Vol. 5/6, 2004
4. ”Japanese Higher Education Internationalization Policy: 1983-2003” Yokkaichi University Journal of Environmental and Information Sciences. Vol. 7, 2004
5. ”Quick Questionnaire” . In R. Day, and J. Bamford, (Eds.). Extensive Reading Activities for Teaching Language. Cambridge University Press. 2004 (pp. 71-72)

口頭発表・学術講演

1. ”The Use of Information Technology in Japanese Higher Education: A Pilot Study” . Edu-Com 2004 Conference New Challenges of Sustainability and Growth in Higher Education. . Khon Kaen, Thailand, November 25, 2004
2. ”Developing Bilingual Literacy” (Panel discussion for the Jalt Bilingualism SIG) Kyoto Kyoiku Bunka Center. Saturday, June 12th, 2004

1.23.2 教育活動

専任科目

英語コミュニケーション基礎 Global Issues ゼミ 2,3

兼任先 (担当科目)

1. 京都産業大学 (Intermediate Discussion 1, English through Role-play)

1.24　本部 賢一，HONBU Kenichi

1.24.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．環境にやさしい自動車購入のための自動車データベースの作成に関する研究

近年、自動車排ガスによる大気汚染の問題が深刻化している。こうした問題に対し、自動車メーカーは燃料電池車などの化石燃料を用いない環境にやさしい究極のエコカーの開発を急ぐとともに、現在主流となっている化石燃料エンジン車についても、NOx や SOx、CO2 などの有毒ガスの排出量を抑えた低排出ガス認定車の開発・販売に力を注いでいる。しかし、こうした自動車メーカーの努力も、利用者の協力なしでは効果は上がらない。すなわち、こうした環境にやさしい自動車の情報を利用者が正しく把握するとともに、できるだけ購入することが望まれる。本研究では、各自動車メーカーから出されている自動車に関するカタログデータのほかに、特に低排出ガス認定を受けている車両については、認定レベルと CO、HC、NMHC、NOx、ホルムアルデヒド、PM などの認定基準となっている成分の排出量データを付加することによって、環境影響値をより具体的に表した自動車データベースを構築した。最終的には大学のホームページで公開することを目標に、サーバ側で動的に動作するシステムを構築するために、プログラミング言語として「PHP（Hypertext Preprocessor）」を、そしてデータ抽出や集計といった”データ加工”のためのデータベースエンジンとして初心者向けのフリーソフトである「MySQL」を用いてデータベースを作成した。

２．鉄道駅におけるユニバーサルデザインに関する研究

現在、我が国では高齢化が急速に進んでおり、2015 年には国民の４人に１人が 65 歳の高齢者となるという他に例を見ない高齢社会を迎えようとしており、高齢者が安心して暮らすことができる社会の形成が望まれている。また、身体障害者についても、社会・経済活動への積極的参加の実現が強く求められている。そのため、これらの人々が気軽に安心して公共交通機関を利用して移動できるようにすることが必要であるが、公共交通機関の利用にあたっては現に様々な障壁（バリア）が存在しており、この障壁の除去（バリアフリー化）が大変重要となっている。バリアフリーとは、すでに出来上がっている製品・建物・環境等に対し、障害のある人が社会生活をしていく上で障壁となるものを取り除き、生活しやすくすることを意味する。それに対し、ユニバーサルデザインとは、これから新しく作ろうとする製品・建物・環境に対し、老若男女・健常者・障害者等の特性を問わず、すべての人にとって、できる限り利用可能であるように配慮した計画、設計のことである。本研究では、現在ユニバーサルデザインが鉄道駅においてどの程度普及し、適切に機能を果たしているかについて検討を行った。事例研究として、近鉄四日市駅を対象に実地調査を行うともに、三重県の「ユニバーサルデザインの整備基準マニュアル」と比較することで、施設の適正について検討した。

３．リアルタイム地震防災システム導入の現状と課題に関する研究

1995 年 1 月 17 日に発生した兵庫県南部地震は、巨大災害が都市社会に与える影響をまざまざと見せつけた。地震が早朝６時前に発生したにも拘らず、首相が被害の深刻さを知ったのは午後になってからであり、地元自治体やライフライン企業も初動体制を確立するのに手間取った。このた

め、危機管理能力の問題がクローズアップされた。一方、戦後 50 年間に蓄積された耐震性に問題のある社会ストックの量は膨大であり、これらの早期改修・改築は困難な状況にある。このため、神戸級の揺れの再来に対しては、建物被害を前提にした対策を立てざるをえず、ハード面の対策に加え、被害波及を最小限にするための、情報活用によるソフト的な対処法を構築する必要がある。災害規模が巨大になるほど情報の重要性が増し、「危機管理」のための情報整理のウェイトが高くなる。危機管理には原則として２つの方策がある。これらは、発災前の事前対策（災害の予防計画）と、発災後の事後対策（災害の応急計画・復興計画）である。事前対策としては、建物の耐震設計、耐震診断・改修、地震被害想定、防災拠点の整備、防災物資の備蓄などが考えられる。しかし、事前対策を行うには時間的にも財政的にも限界が有る。このため、発災の最中及び直後対策として、リアルタイム地震防災という考え方が着目されるようになった。本研究では、”ユレダス”や”安震君”といったリアルタイム地震防災システムの現状を把握・整理を行うとともに、今後の課題についてとりまとめた。リアルタイム地震防災システムを効果的に利用するためには、それぞれのニーズに合わせた事前対策が必要であり、また机上の空論で終わらぬよう、現実に起こりうるさまざまな状況を想定した上で、今後、国や自治体とライフラインを担う企業が広域的に合同で訓練を実施していく必要がある。

1.24.2　教育活動

専任科目

都市交通と環境（生活環境論１），都市交通システム論，コンピュータリテラシ（基礎プログラミング），環境情報学概論１（環境・情報文化論１），環境情報学概論２（環境・情報文化論２），基礎セミナー１，基礎セミナー２，専門セミナー，卒業研究セミナー.

兼任先 (担当科目)

岐阜大学地域科学部（地域振興論）.

特別な教育活動

1. ＡＯ入試合格者事前指導「コンピュータ入門」講師（2005 年 2 月）.

1.24.3　社会活動

外部委員

1. 四日市市緑化推進委員会副委員長.
2. 四日市市地域交通円滑化対策研究会アドバイザー.

講師

1. 四日市大学出張講座「交通と環境」三重県立飯南高等学校（2004 年 10 月 7 日）.
2. 体験学習・模擬授業「環境」三重県立朝明高等学校（2005 年 1 月 18 日）.

1.25　山形 多聞，YAMAGATA Tamon

1.25.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

1. スタジオ　ホールの照明設計の研究

ベトナム TV スタジオの照明設計図書の解析と設計見直し案を研究某宗教団体総本山の神殿の照明設計研究　従来の舞台照明器具から最新の LED やメタルハライドランプ　HID 等を多用した高演出　長寿命のライティングプランを研究

2. 建築物が置かれた緯度の高低差による採光と文化の違いの研究

今年の卒業生に与えた研究テーマでもあるが　緯度の高低差によって建築様式から窓の形や庇まで違うことを検証しながら　それに伴う文化（絵画やガラス工芸など）の違いを北欧　日本　アメリカを例にとって研究

3．絵画　彫刻等への新しいライティング方法についての研究

美術館や博物館展示の照明技法でない　作品をより理解しやすく　またより高品位に見せる手法の研究

発表論文・図書，作品

1. 「芸能山城組」「春祭り」の照明プランニング（５月）
2. 「芸能山城組」「ケチャ祭り」の照明プランニング（７月）

口頭発表・学術講演

1. 「言語を超えたコミュニケーション」三重県生涯学習センター・７月–三重文化会館
2. 「言語を超えたコミュニケーション」三重県生涯学習センター・１１月–伊勢学び学園
3. Knowledge Hub pre BCA 2005 11 jan Singapore

1.25.2　教育活動

専任科目

映像環境論 1，2，舞台芸術論，メディア産業史，イベント制作論（オムニバス），照明セミナー（基礎，専門，卒業）

特別な教育活動

1. ゼミ生と共に　諏訪公園サマーライブの照明（８月）諏訪公園「音と光のファンタジー」公演（１１月～２月）
2. ゼミ生と共に　桑名コミュニティーセンター（９月）　渋谷 BOX（１０月）名古屋市緑区文化小劇場（１２月）「クニケン」ライブの照明

1.25.3　社会活動

学会委員

1. 日本照明家協会会員
2. 日本バーチャルリアリティ学会会員
3. 大四日市まつりなどのあり方を考える市民会議会長

講師

1. 三重 21 世紀ゼミナール四日市商工課 9 月

1.26　山本　伸，YAMAMOTO Shin

1.26.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．英語圏カリブ文学研究

本年度もカリブ海地域独自の歴史的，社会的な経緯から生まれた「異文化融合」や「差異による相互肥沃化」といった複数文化への視点が，急速に拡がりつつある現代社会そのものに対して多くの示唆を含んでいるという観点に立って，カリブ在住作家および英米へのカリブ移民一世，二世作家について，その視点を中心に探っている．その成果は，”Racial Stance of Chinese in Willi Chen’s King of the Carnival”（「四日市大学環境情報論集第 7 巻第 1 号」），”Between Home and Home: Glocalizing the Mind in the Work of Edwidge Danticat”(unpublished: Rockefeller Foundation Bellagio Conference, Italy, August 27-September 1, 2003),「平和のための記憶–エドウィージ・ダンティカの「語り」の文学世界」（『リーラー「遊」Vol.3』）,「カリブ海世界–終わりなき変容」（『季刊民族学』No.105）および「東京新聞」「中日新聞」（2 月 6 日付）文化欄掲載の「世界の文学–ガイアナ」等に発表されている．

２．英語圏カリブ関連書（歴史）の翻訳・出版

本年度は，エリック・ウィリアムズ著『資本主義と奴隷制』（明石書店）を監訳出版した．原著出版からちょうど 60 年目にあたる今年，出版以来絶えず議論を巻き起こしながらも論破されることなく現在に至っている「ウィリアムズテーゼ」を，新訳によって復活させた．なお本書は，ユネスコの世界遺産に登録されているエリック・ウィリアムズ・メモリアル・コレクション (EWMC) に収蔵されることが決まった．

３．グローバリゼーション，ローカライゼーション，およびグローカライゼーション研究

本年度も，グローバルとローカルの関係を文化的，心理的に位置付ける試みを，文学研究の枠組のなかで行った．その過程で，沖縄国際大学での夏期集中講座（8 月）やニューヨーク市立大学クイーンズ・カレッジでの特別講義（2 月）等における学生の反応は大いに参考になった．同じようにグローバライズされていても，文字どおりエスニシティの高い地域ではそうでない地域に比べ，ローカルという概念がそれに抗する形で毅然とした位置を安定的に保っていることが実感できた．

発表論文・図書，作品

1. ”Racial Stance of Chinese in Willi Chen’s King of the Carnival”（「四日市大学環境情報論集第 7 巻第 1 号」）
2. 「平和のための記憶–エドウィージ・ダンティカの「語り」の文学世界」（『リーラー「遊」Vol.3』文理閣）
3. 「カリブ海世界–終わりなき変容」（『季刊民族学』No.105）
4. 「世界の文学–ガイアナ」（『東京新聞』『中日新聞』2 月 6 日夕刊）

5. 『資本主義と奴隷制』（監訳　明石書店）

6. 『黒人研究の世界』（青磁書房）

口頭発表・学術講演

1. ”Between Home and Home: Glocalizing the Mind in the Work of Edwidge Danticat”(Rockefeller Foundation Bellagio Conference, Italy, August 27-September 1, 2003)

2. 「イタリア・ベッラジオ会議についての報告」（黒人研究の会 9 月例会，2003 年 9 月）

1.26.2　教育活動

専任科目

英語コミュニケーション基礎，英語コミュニケーション 1・2，英語講読表現 1

兼任先 (担当科目)

名古屋外国語大学外国語学部（英語講読・文法），松阪大学政策学部（講読英語，総合英語），沖縄国際大学文学部（英米文学特殊講義・夏期集中）

1.26.3　社会活動

学会委員

1. ポップカルチャー学会（APOCS）副代表

2. 黒人研究の会（JBSA）事務局長

3. グローバルネットワーク 21（GN21）常任理事

4. 多民族文化研究会（MESA）理事

外部委員

1. 文部科学省認定実用英語検定二次試験面接官（7 月，11 月，2 月）

1.27　吉山　青翔，YOSHIYAMA Seisho（王　青翔，WANG Ching-shiang）

1.27.1　研究活動

本年度の研究課題・概要，創作課題・概要

１．日中比較科学史・比較言語文化

- 「日本と朝鮮における「算経十書」の受容様式の比較研究」
- 「文化論の視角から見たる中国歴史上纏足廃止運動失敗の原因–ハイヒール廃止運動との比較を中心に–」

２．環境思想史・環境哲学

「エレン・スワローのエコロジー思想の構造–環境科学の創立者＝エレン・スワローの研究（２）–」

発表論文・図書，作品

1. 「文化論の視角から見たる中国歴史上纏足廃止運動失敗の原因–ハイヒール廃止運動との比較を中心に–」（論文・単著）、四日市大学学会環境情報学部部会『四日市大学環境情報論集』第８巻第２号（２００５年３月）
2. 「関孝和の数学思想の仕組み、およびそのアプローチするハウツー」（論文・単著）、日本科学史学会『科学史研究』投稿中

口頭発表・学術講演

1. 「環境科学の誕生過程–エレン・スワローのエコロジー思想の構造–」（単著），日本科学史学会第 51 回年会（200 ４年５月 29 日，於東京工業大学）

1.27.2　教育活動

専任科目

科学・技術史，環境のための思想論，現代環境思想論，中国語コミュニケーション３，基礎セミナー，専門セミナー，卒研セミナー

特別な教育活動

1. 四日市市民大学講師「中国の文化と価値観」（2004 年 10 月 6 日）

第2章　学部としての活動

2.1　活動記録

- [07 月 7 日] 三重県立飯南高等学校へ模擬講義『環境と土』（大倉）
- [05 月 8-10 日]「持続可能な成長とエネルギー環境技術に関するアジア太平洋会議」を主催
- [05 月 13 日] 県立飯南高等学校へ四日市大学出張講座縄文時代の植生変化と生活＆生物学からみた学習（田中伊）
- [05 月 17 日] 県立飯南高等学校へ四日市大学出張講座「歴史からみた環境問題」（播磨）
- [07 月 20 日] オープンキャンパスＡＯ入試講義,「民族音楽とアニミズム」（杉田）
- [09 月 09 日] 県立飯南高等学校へ四日市大学出張講座「コンピュータとインターネット」（城之内）
- [09 月 19 日] 四日市市市民大学講座「生物学から見たヒトの特性とは」（田中伊）
- [10 月 07 日] 三重県立久居農林高等学校へ出張講義『水田の功罪』（大倉）
- [10 月 07 日] 県立飯南高等学校へ四日市大学出張講座「コンピュータと経営」（都島）
- [10 月 18 日] 私立暁高等学校へ四日市大学出張講座「遺伝子と進化」（田中伊）
- [11 月 4 日] 県立久居農林高校における連携授業「情報環境とメディア」（高杉）
- [11 月] 県立飯南高等学校へ四日市大学出張講座「交通と環境」（本部）
- [02 月] 久居市青山高原ウインドファーム（四日市大学エネルギー教育研究会）（朝日）
- [02 月] 神鋼電機伊勢製作所（四日市大学エネルギー教育研究会）（朝日）
- [02 月]AO 入試合格者事前授業（コンピュータ入門）（井岡，城之内，本部，千葉）
- [02 月] 入試合格者事前指導「数学」(小川)
- [02 月 24 日] 県立四日市農芸高校へ四日市大学出張講座「むかしの環境問題」（播磨）
- [02 月]AO 入試合格者事前授業「論文講読・論文作成」

2.2　新聞記事

朝日新聞 平成 16 年 3 月 09 日

2004年(平成16年)3月9日　火曜日　3版　2

With

■きゃんぱす

「音響のプロ」夢に特訓

四日市大「音・環境ゼミ」

「マイクの高さは、これくらいでいいかな」「それでは音が入らない。もうちょっと低く」。四日市大学（三重県四日市市）のスタジオで、学生たちが真剣な表情でセッティングを繰り返す。

「音・環境ゼミ」、通称「音ゼミ」。環境情報学部の豊島政実教授(64)の指導で、マイクやスピーカーなど音響機器の操作や、良質な音響、照明、空調を備えたスタジオ設計を学ぶ。

豊島教授は音響設計家として、ビートルズの活動拠点だった英国・ロンドンのアビーロードスタジオを改装した経歴をもつ。全国でも珍しい同大の専用スタジオも、豊島教授がビクター勤務時代に設計。その縁で3年前、教授に招かれた。

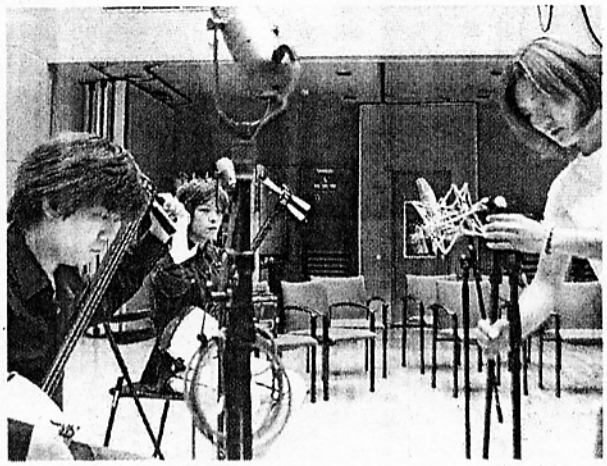
ゼミ生の多くの夢は、音楽関係の仕事につくこと。裏方を志したり、自ら演奏者を目指したり。「大手のすき間を狙い、運動会の放送業務などで起業したい」と話す学生もいる。

ゼミは昨年8月、同市出身の津軽三味線兄弟ユニット「KUNI−KEN（クニケン）」のCD制作に協力した。録音会場は、大学のスタジオだ。エンジニアの指示で、マイクの向きの調整や時間の計測など、細かな作業を手伝った。音程の少しのズレにも納得しない2人を見守り、プロの世界をかいま見た。

アルバムは昨年秋に完成。CDジャケットには、手伝った学生10人の名前が刷り込まれた。昨年10月には、ゼミのメンバーが中心となって企画し、学園祭でCD発売記念のKUNI−KENライブも行った。

そんな活動を、ゼミ生たちは誇りにしている。映像制作会社への就職を目指して活動中の平林裕江さん（3年）は、ゼミでのCD制作の経験を真っ先にアピールする。「他の大学ではできない、貴重な経験ですから」

（木村浩之）



CDレコーディングをサポートするゼミ生（右）と「KUNI−KEN」の2人＝03年8月31日、三重県四日市市萱生町の四日市大で

図 2.1: 朝日新聞 平成 16 年 3 月 09 日